研究主題

自尊感情や自己肯定感に関する研究（５年次）

目　次

第１　研究の概要 ・・ 4
第２　研究の背景とねらい ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
１　研究の背景 ・・ 5
２　本研究の目的 ・・・ 5
３　４年次までの研究成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
４　５年次の研究 ・・・ 7
(1) 研究のねらい
(2) 研究の方法
５　研究に関する指導資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
(1)「自信　やる気　確かな自我を育てるために【基礎編】（平成 23 年３月）」・・・ 8
(2)「自信　やる気　確かな自我を育てるために【発展編】（平成 24 年３月）」・・・ 9
第３　研究の内容
１　「自尊感情や自己肯定感を高めるための教育」推進校等の取組 ・・・・・・・・・・ 10
(1) 千代田区立九段幼稚園 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
(2) 目黒区立五本木小学校 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
(3) 町田市立町田第五小学校 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
(4) 小平市立花小金井南中学校 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
(5) 清瀬市立清瀬第三中学校 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
(6) 都立第三商業高等学校 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
(7) 都立墨東特別支援学校 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
(8) 関係教育委員会 ・・ 38
２　教員研修等の取組 ・・ 40
(1) 夏季集中講座「自尊感情と自己肯定感を高める教育」・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
(2) 専門性向上研修「心の教育」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
(3) 都教委訪問 ・・ 45
(4) 他道府県への発信 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
第４　研究の成果と今後の方向性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
１　今年度の成果 ・・ 47
２　５年間の成果 ・・ 47
３　今後の方向性 ・・ 47
○参考文献等 ・・ 48
○平成 24 年度　自尊感情や自己肯定感に関する施策・研究等経過 ・・・・・・・・・・・ 48

＜研究の成果と活用＞

１　研究の成果

(1)　推進校の取組、夏季集中講座、教育フォーラム等を通して、子供の自尊感情や自己肯定感を社会全体で高めることの重要性を教師、保護者、地域住民へ普及・啓発できた。

(2)　推進校等の取組を基に、各教科等の指導で子供の自尊感情や自己肯定感を高める具体的な「学習内容」や「学習方法」の提案を行うことができた。

２　研究成果の活用

「自己評価シート」「他者評価シート」を継続的に実施することにより、子供の自尊感情の傾向や推移を把握し、不登校やいじめ等の問題行動の未然防止、早期発見、早期解決に役立てることができる。

第１　研究の概要

自尊感情や自己肯定感に関する研究（５年次）

＜社会背景と学校の現状＞
- 核家族世帯の割合の増加
- 地域の人間関係の希薄化
- 人間関係を築く力や規範意識の低下
- いじめや不登校などの問題
- 生命尊重や心の教育の重要性の再認識
- 自尊感情や自己肯定感の低さ
- 特別な支援が必要な子供の教育の充実

＜関連施策等＞
- 東京都人権施策推進指針
- 「東京都教育ビジョン」（第２次）重点施策 25
  「人間関係を築く基礎となる力の育成」
- 平成 24 年度教育庁主要施策
  〈豊かな心を育てる〉
  〈国際社会で活躍できる人材を育てる〉
- 東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画

１年次から４年次までの研究

１年次（平成 20 年度）「自尊感情とは何か」を明らかにし、子供の自尊感情を高めるための５観点を設定
「自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点」(試案)の作成

２年次（平成 21 年度）　自尊感情の定義付け、自尊感情の傾向を客観的に把握する「自己評価シート」の開発
研究概要(リーフレット)の作成･配布(都内公立学校各1部配布　3,500 部作成)

３年次（平成 22 年度）「自己評価シート」及び発達段階に応じた指導方法の開発
発達段階に応じて自尊感情の傾向を適切に把握する「自尊感情測定尺度(東京都版)」の開発
「子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料【基礎編】」の作成･配布(都内公立学校･園の全教員に配布　63,500 部作成)

４年次（平成 23 年度）「他者評価シート」及び学校の教育活動全体を通した取組の開発
自己評価を行うことが難しい子供をはじめ、全ての子供の自尊感情の傾向を把握する「他者評価シート」の開発
「子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料【発展編】」の作成･配布(都内公立学校･園の全教員に配布　63,500 部作成)

５年次の研究

取組の内容
推進校・園を６校・１園指定、研究授業や発表会等を実施、研究成果の活用と普及・啓発、教育フォーラムの開催、普及・啓発のためのリーフレットの作成・配布等により、広く都民に本研究の内容を周知

取組の方法

【推進校・園】

幼	千代田区立九段幼稚園
小	目黒区立五本木小学校
	町田市立町田第五小学校
中	小平市立花小金井南中学校
	清瀬市立清瀬第三中学校
高	都立第三商業高等学校
特	都立墨東特別支援学校

- 「自己評価シート」と「他者評価シート」の理解及び効果的な活用
- 自尊感情の傾向を踏まえた指導の実践・検証
- 本研究の内容を基にした研究発表会、学校公開、道徳授業地区公開講座、講演会などの実施
- 関係教育委員会主催の校長会や研修会等における推進校・園の取組や研究内容の紹介

【東京都教職員研修センター】
- 推進校・園の進捗状況把握及び指導・助言
- 自尊感情や自己肯定感に関する研修会等に講師として訪問し、研究内容の説明及び指導資料の普及・啓発
- 区市教育委員会と連携し、指導資料を活用した研修会の実施（校長・副校長会、主任研修会、人権教育推進委員会等）
- 室課長会、学校経営支援センター連絡会等で指導資料の活用について周知
- 子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育フォーラム開催（平成 25 年３月９日）
- 自尊感情や自己肯定感に関する研究リーフレットの作成

取組の成果
- 「自己評価シート」「他者評価シート」を用いて自尊感情の傾向を把握する学校・園を紹介
- 推進校・園の実践等により、子供の自尊感情を高める重要性を保護者、地域へ普及・啓発

５年間の研究成果

- 自尊感情の３観点のバランスに着目した自尊感情を高める指導の工夫を提案
- 学校、家庭、地域が一体となり社会全体で子供の成長や活動を認め励ます取組の普及
- 自尊感情を高めることが、規範意識を高め、学力向上・体力向上につながることの検証
- 「自尊感情測定尺度（東京都版）」を都内のみならず全国の教育委員会、学校、園へ発信

第２　研究の背景とねらい

１　研究の背景

本研究は「東京都教育ビジョン（第２次）」（平成20年５月）に基づき、「子供の自尊感情を高めるための教育の充実」を推進するための研究として、平成20年度より５か年計画で進めてきたものである。

「東京都教育ビジョン（第２次）」では、「他者との人間関係をつくることが不得手になっている子供が増え、そのことがいじめや不登校などの問題の一因になっているとの指摘がある。人間は他者や社会とのかかわりの中で生きていくものであり、人間関係を築いていく力の育成は重要な課題である。」と述べている。次世代を担う子供たちが、他者や社会との関わりの中で生きていくためには、人間関係を築く力を身に付け、自分と他者との関わり、社会の中での個人の役割や責任に対する自覚などを涵養し、社会への参画意識を高めることが必要である。

一方、教育環境の整備の視点からは、全ての子供たちに次世代を担う力を身に付けさせるためには、特別な支援が必要な子供たちを含めて、個に応じた適切な教育環境を整備していくことが求められる。乳幼児期から青年期までの園・学校間等における接続を円滑に行うとともに、幼稚園、小学校、中学校等に在籍する教育上特別な支援を必要とする幼児・児童・生徒に対する適切な指導及び必要な支援の体制整備が急務とされている。

さらに、「全国学力・学習状況調査（平成 22 年度）」（文部科学省）や「高等学校教育内容改善検討委員会報告書（平成 22 年３月）」（東京都教育委員会）では、東京都の子供たちの規範意識の低下などの問題が指摘されている。人としてよりよく生きていくために、社会の一員としての規範意識を高め、公共心、思いやりの心を育成することが求められている。また、学校・家庭・地域が連携し、社会全体で子供の教育に取り組む必要がある。

これからの社会で、子供たちが自分の未来を切り拓いていくため、相手の考えや気持ち、立場などを想像し、新たな関係や社会を創造していく力を身に付けること、積極的にコミュニケーションを行う能力の育成や思いやりのある豊かな人間性などの育成が必要となる。中でも、社会の一員としての自覚をもち、自分に自信をもって生きていくために、自分のよさを肯定的に捉え、自分のことをかけがえのない存在、価値ある存在として捉える自尊感情や自己肯定感を高めていくことが重要である。

このことは、人権尊重の理念の理解や人権意識を高める上でも重要な視点であり、児童・生徒は異なる価値観をもつ相手を受容したり、自分の大切さを他の人の大切さにつなげたりすることができるようになる。

２　本研究の目的

以上の背景から、本研究における５年間の研究の目的を次のように定めた。

研究成果を生かした指導内容・方法を開発するとともに教員研修を実施することによって、子供一人一人が自己に自信をもち、新たなことや困難なことにも挑戦しようとする意欲を高める教育を推進する。

３　４年次までの研究成果

(1)　１年次（平成 20 年度）

「自尊感情とは何か」を明らかにし、子供の自尊感情を高めるための５観点を設定

心理学者ローゼンバーグなどの自尊感情の捉え方についての先行研究を踏まえ、「自尊感情とは何か」を明らかにし、子供の自尊感情を高めるための５観点（「自分への気付き」、「自分の役割」、「自分の個性と多様な価値観」、「他者とのかかわりと感謝」、「自分の可能性」）を設定した。また「自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点」（試案）を作成した。

(2)　２年次（平成 21 年度）

自尊感情の定義付け、自尊感情の傾向を客観的に把握する「自己評価シート」の開発

慶應義塾大学との共同研究により、子供の自尊感情の傾向を把握する「自己評価シート（質問項目 32 項目）」を開発した。また、自尊感情の傾向を踏まえて指導の方向性を検討するために「自尊感情や自己肯定感を高める指導上の留意点」を作成した。そして、その有効性を第Ⅱ期（児童期前期　６歳～10 歳）から第Ⅲ期（児童期後期～思春期前期　11 歳～14 歳）の児童期において検証し、自尊感情や自己肯定感を高めるための指導事例【小学校版】としてまとめた。研究成果については、研究概要（リーフレット）を作成し、配布した。（都内公立学校に各１部配布　3,500 部作成）

(3)　３年次（平成 22 年度）

自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」及び発達段階に応じた指導方法の開発

２年次（平成 21 年度）に自尊感情の傾向を適切に把握する方法として開発した「自己評価シート」について、さらに因子分析を進めた結果、自尊感情を構成する因子を５因子から３因子（「Ａ　自己評価・自己受容」「Ｂ　関係の中での自己」「Ｃ　自己主張・自己決定」）に確定し、22 項目の質問項目を有する「自己評価シート」を「自尊感情測定尺度（東京都版）」として決定し、質問項目（22 項目）の有効性を検証した。

図１　自尊感情を構成する３因子【確定因子】

※　「自信 やる気 確かな自我を育てるために【基礎編】（平成 23 年３月）」より

また、子供の自尊感情の傾向分析を行い、自尊感情を構成する３因子（以下、「自尊感情の３つの観点」と表記。）（図１）による傾向を把握できるようにするとともに、「自尊感情や自己肯定感を高める指導上の留意点」を改訂し、自尊感情の傾向を踏まえた指導の方向性を示した。さらに、自尊感情や自己肯定感を高める教育の推進に活用できる指導資料【基礎編】を作成し、都内公立学校・園の全教員を対象に配布した（63,500 部）。

(4)　４年次（平成 23 年度）

「他者評価シート」及び学校の教育活動全体を通した取組の開発

３年次（平成 22 年度）までの研究では、子供の自尊感情の傾向を把握するための「自己評価シート」を開発したが、子供の発達段階や障害等の様々な状況によっては、子供自身で自己

を評価することが難しいという実態が見られた。そこで、４年次（平成 23 年度）の研究では、研究協力校（特別支援学校等）における児童・生徒を観察した行動等を整理し、自己評価を行うことが難しい子供の自尊感情の傾向を把握するための「他者評価シート」を開発した。このことによって、子供自身による「自己評価」とともに、このシートを活用することで教員や保護者等による他者からの評価を可能にし、さらに子供の自尊感情の適切な把握ができると考えた。

また、研究協力校の児童・生徒を対象に「自己評価シート」を年間３回実施し、自尊感情の傾向を把握した。その結果を踏まえ、日常の授業や学校行事等、学校の教育活動全体を通して意図的・計画的・組織的に子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育を推進する取組を実施した。

具体的には、研究協力校において、全体計画や年間指導計画等の指導計画を作成して、学校の推進体制を整備するとともに、「学習内容」で高める、「指導方法」で高めるという二つの方向から自尊感情や自己肯定感を高める各教科等の指導の工夫を継続的に行った。これらの実践を受け、事前・事後の子供一人一人の自尊感情の傾向を比較し、その取組の効果を検証した。さらに、自尊感情の傾向に関連する要因を調査するために、子供一人一人の自尊感情の傾向を分析した。次に、先行研究や研究協力大学によるこれまでの調査研究等から自尊感情の高低や３観点の状況に関連すると考えられる、規範意識、親子（保護者）関係、学校適応、友達関係、社会性に関する項目について、研究協力校の児童・生徒を対象に質問紙法で調査を実施し、児童・生徒の自尊感情の傾向と規範意識等との関連を調査した。また、教員による児童・生徒の行動観察を併せて実施することにより、自尊感情の高低や３観点の状況に関連する要因について分析した。

４　５年次の研究

(1) 研究のねらい

５年次の取組は、これまでの研究成果の普及・啓発を目的に、研究のねらいを次のように設定した。

研究のねらい
「自尊感情や自己肯定感に関する研究」の研究成果を学校・幼稚園だけでなく、家庭・地域へ普及・啓発し、子供の自尊感情や自己肯定感を高める教育を社会全体で推進する。

(2) 研究の方法

研究の方法は、次の３点である。

ア　推進校・園を６校・１園指定し、推進校・園において教員だけでなく保護者、地域を対象とする研究授業や発表会を実施するなど、これまでの研究成果の活用と普及・啓発を行う。

イ　「夏季集中講座」「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育フォーラム」等の開催や普及・啓発のためのリーフレットの作成・配布を通して広く都民に周知する。

ウ　自尊感情や自己肯定感に関する校内研修会等を実施する学校を訪問し（都教委訪問）、研究内容の説明及び指導資料【基礎編】、【発展編】の普及・啓発を行う。

５　研究に関する指導資料

(1)「自信　やる気　確かな自我を育てるために【基礎編】（平成 23 年３月）」

ア　自尊感情を構成する３因子【確定因子】

慶應義塾大学との共同研究により、自尊感情を構成する因子を３つのまとまりに確定することができた。これら自尊感情の３つの観点に基づいて、子供の自尊感情の傾向を把握することとした。

A 自己評価･自己受容

自分のよさを実感し、自分を肯定的に認めることができるようにする。
この観点は、教師との関係において影響が大きいことから、教師からの評価や言葉掛けによる効果が期待できる。

■指導上の留意点■
・成果の発揮・相互理解
・努力の評価

B 関係の中での自己

多様な人との関わりを通して、自分が周りの人に役立っていることや周りの人の存在の大きさに気付くようにする。
学習に対する意欲や良好な友人関係においての影響が大きいことから、学習や友人関係の構築についての支援による効果が期待できる。

■指導上の留意点■
・他者理解・理解者の存在の気付き
・貢献意欲・支えの気付き
・きまりの遵守

C 自己主張･自己決定

今の自分を受け止め、自分の可能性について気付くようにする。
学校では進路指導においての影響が大きいことから、キャリア教育などによる指導の効果が期待できる。

■指導上の留意点■
・自己信念の遂行意欲
・個性の認知
・可能性の認知

自尊感情の３つの観点を高めるポイント

イ　自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」

子供の自尊感情の傾向を把握するためには、その傾向を発達段階に応じて捉えていくことが大切である。そこで東京都教職員研修センターと慶應義塾大学とで、学校教育に求められる自尊感情の傾向を分析し、発達段階に応じて適切に把握できる 22 の質問項目からなる自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」を開発した。

質問に対して、自分の気持ちに近い数字に○をつけてください。
「あてはまる」場合は４、「どちらかといえばあてはまる」場合は３、
「どちらかというとあてはまらない」場合は２、「あてはまらない」場合は１を○でかこんでください。

〈記入例〉

	あてはまる	どちらかというとあてはまる	どちらかというとあてはまらない	あてはまらない
例）何よりも秋が好きである	4	(3)	2	1

No.	項　目				
1	私は今の自分に満足している。	4	3	2	1
2	人の意見を素直に聞くことができる。	4	3	2	1
3	人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる。	4	3	2	1
4	私は自分のことが好きである。	4	3	2	1
5	私は人のために力を尽くしたい。	4	3	2	1
6	自分の中には様々な可能性がある。	4	3	2	1
7	自分はダメな人間だと思うことがある。	4	3	2	1
8	私はほかの人の気持ちになることができる。	4	3	2	1
9	私は自分の判断や行動を信じることができる。	4	3	2	1
10	私は自分という存在を大切に思える。	4	3	2	1
11	私には自分のことを理解してくれる人がいる。	4	3	2	1
12	私は自分の長所も短所もよくわかっている。	4	3	2	1
13	私は今の自分は嫌いだ。	4	3	2	1
14	人に迷惑がかからないよう、いったん決めたことには責任を持って取り組む。	4	3	2	1
15	私には誰にも負けないもの（こと）がある。	4	3	2	1
16	自分には良いところがある。	4	3	2	1
17	自分のことを見守ってくれている周りの人々に感謝している。	4	3	2	1
18	私は自分のことは自分で決めたいと思う。	4	3	2	1
19	自分は誰の役にも立っていないと思う。	4	3	2	1
20	私には自分のことを必要としてくれる人がいる。	4	3	2	1
21	私は自分の個性を大事にしたい。	4	3	2	1
22	私は人と同じくらい価値のある人間である。	4	3	2	1

以上で、質問は終わりです。表紙を上にして、先生の指示があるまで静かに待っていてください。

自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」

ウ　自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点

【基礎編】では、子供の自尊感情の傾向を踏まえた「自尊感情や自己肯定感を高めるための留意点」を示している。具体的には、「自尊感情測定尺度（東京都版）」を構成する３つの観点に基づき、意図的・意識的に指導すべき観点を設け、発達段階に応じて指導上大切にしたいことを記載している。この「指導上の留意点」は、学校や学年、学級の実態に応じて、重点に置きたい観点を決め、授業の計画を立てる際の参考にすることができる。

(2) 「自信　やる気　確かな自我を育てるために【発展編】（平成 24 年３月）」

ア　「他者評価シート」

「他者評価シート」は、自己評価が難しい子供の自尊感情の傾向を把握することができるように、慶應義塾大学との共同研究で開発した行動観察シートで、24 項目から構成されている。これらは、研究協力校の授業等を観察し、観察した行動等を分類・整理し、まとめたものである。さらに、24 項目を因子分析し、「安定した学校生活を送るための６つの観点」に整理している。この項目は、子供の行動観察によって、自尊感情の傾向を把握することができるため、「自己評価シート」を補完するシートとして活用できる。

No.	安定した学校生活を送るための6つの観点	24項目
1	①人への働き掛け	自分から友達に働き掛ける。
2		日常的に交流の少ない相手にも関わる。
3		自分の思いや意見を何らかの手段で表現する。
4		集団の中で意欲的に行動する。
5	②大人との関係	特定の大人を信頼して心を開く。
6		大人との関わりを受け入れる。
7		自分から身近な大人に関わる。
8	③友達との関係	友達との関わりを受け入れる。
9		友達のことを考えて発言する。
10		友達のことを考えて行動する。
11	④落ち着き	自分から気持ちを立て直す。
12		これまでできなかったことに取り組む姿勢が見られる。
13		一つのことを最後まで取り組む姿勢が見られる。
14		自分の行動を自分で決める。
15	⑤意欲	肯定的な言葉掛けにより安定する。
16		肯定的な言葉掛けにより嬉しそうにする。
17		新しいことができると嬉しそうにする。
18		肯定的な言葉掛けにより次への意欲につながる。
19	⑥場に合わせた行動	相手の要求を受け入れる。
20		相手の指示を受け入れる。
21		ルールを守って行動する。
22		集団の雰囲気になじんでいる。
23		集団の活動に合わせて行動する。
24		状況に応じて臨機応変に行動する。

「他者評価シート」の「安定した学校生活を送るための６つの観点」及び「24 項目」

イ　自尊感情や自己肯定感を高めるための各教科等における指導

(ｱ) 「学習内容」で高める

教科等の学習内容には、自尊感情や自己肯定感と関連の深いものがある。この学習内容を理解させること自体が子供の自尊感情や自己肯定感を高めることにつながる。このような学習内容を年間指導計画の中に適切に位置付け、計画的に取り組むことが大切である。

（例）自己を振り返る学習、自己の個性を発見する学習、生命の尊さを考える学習など

(ｲ) 「指導方法」で高める

子供が互いの考えを表現し、認め合えるようにするなどの指導を通して、「できた」、「分かった」と実感をもてたり、教師や友達に認めてもらい、共に学ぶよさを感じたりすることができたとき、子供の自尊感情や自己肯定感は高まる。教員自身が指導方法を振り返り、より効果的な指導方法を工夫してみることが大切である。

（例）友達と関わりながら学ぶ学習方法の工夫、主体的に取り組める教材・教具の工夫など

ウ　家庭・地域との連携

(ｱ) 発信する

学校運営連絡協議会や保護者会、学校便り等で、学校・園における子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育の推進について、家庭、地域等に積極的に発信する必要がある。

また、学校公開等では、子供の自尊感情や自己肯定感を高めることに重点を置いた授業等を行い、具体的な指導の工夫や子供への言葉掛けなどを保護者や地域の方に見てもらい、家庭や地域でも実践してもらえるようモデルを示すなどが考えられる。

(ｲ) 共に取り組む

学校・園における教科等の学習や長期休業日中に行われる様々な取組に、家庭･地域の人材を活用するなど、共に取り組める活動を推進する中で、子供の自尊感情や自己肯定感を高めることができる。保護者会、行事等を通して、理解と協力を得ていくことが大切である。

第３　研究の内容

１　「自尊感情や自己肯定感を高めるための教育」推進校等の取組

(1) 千代田区立九段幼稚園

研究主題　「感じ合い・認め合い・高め合う」

～　一人一人の自尊感情や自己肯定感を高める指導の工夫　～

ア　ねらい

千代田区立九段幼稚園は、前年度までに、研究主題「一人一人の自己肯定感を高めるために【感じる・考える・伝え合う】」として研究を行った。研究を通して、幼児が「自分が好き」、「自分は大切にされている」、「自分は受け入れられている」と実感し、自ら人やものに関わることの楽しさや思いをかなえることができた喜びを十分に味わう中で、様々なことに自分で乗り越えていく力を育むことをねらいとした。

今年度は、研究をさらに深めるために、前年度までに課題となっていた「自尊感情や自己肯定感は、様々な人との関わりの中で相手に認められてこそ高まる」ことを踏まえ、「認め合う」を視点に加えた。互いに相手の存在を「感じ合い」、相手のよさを「認め合う」活動に取り組んだり、友達と関わったりすることが幼児の意欲や自信を「高め合う」と考え、研究主題を「感じ合い・認め合い・高め合う」とした。

研究を進めるに当たっては、東京都教職員研修センターが平成 20 年度より継続の研究として積み重ねてきた「自尊感情や自己肯定感に関する研究」の成果を活用し、主題に迫る指導の在り方を探ることとした。そこで、副主題を「一人一人の自尊感情や自己肯定感を高める指導の工夫」とした。

イ　方法

(ｱ) 週の指導計画・指導記録の工夫
(ｲ) 幼児の自尊感情の傾向分析
(ｳ) 研究保育及び研究協議会の実施
(ｴ) 研究報告会・講演会の実施
(ｵ) 保護者との連携

ウ　内容

(ｱ) 週の指導計画・指導記録の工夫

「他者評価シート」における子供の状況等を理解する三つの側面である「対人関係」、「自己行動の制御」、「社会的なルールの理解」を視点に幼児の実態を捉えた。また、週の指導計画の記録の中に「研究との関わり」の欄を設定し、自尊感情や自己肯定感が高まったと考えられる事例を記入した。更に「環境の構成」、「教師の援助」の欄に自尊感情と自己肯定感を高めるための指導上の留意点と結び付けた記録を継続して行うことで、発達の時期に応じた必要な指導の在り方を探った。

○歳児　　組　期　第△週（ 月 日～ 月 日）			
園長		副園長	
前週の幼児の実態と考察		研究との関わり	
		・前週の幼児の姿で自尊感情や自己肯定感を高めることにつながる姿を記入する。	
週のねらい			
環境の構成		教師の援助	
・子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料【発展編】88・89 頁「自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点」と関連するものを（B－③等）記載する。			

週の指導計画・指導記録

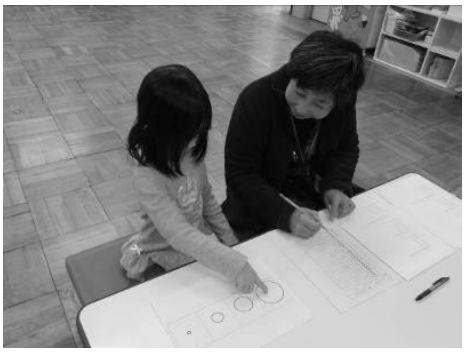
(ｲ) 幼児の自尊感情の傾向分析

「自己評価シート」及び「他者評価シート」を活用し、幼児一人一人の自尊感情や自己肯定感の傾向を把握し、幼児理解や指導に生かした。その際、幼児の発達段階に合わせ、「自己評価シート」及び「他者評価シート」を以下の方法で活用した。

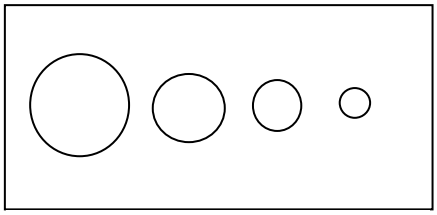
Ａ　「自己評価シート」の５歳児への実施

どの幼児に対しても同じ基準で、同じ内容で質問できるように静かな部屋で実施し、副園長が全幼児に対応した。低学年用「自己評価シート」を利用し、５歳児が理解できる言葉を使って伝えるようにした。

質問する際には幼児本人の名前を入れて、その幼児が自分のこととして受け止められるようにした。実施に当たっては、幼児が質問に対する４段階の評価ができるように、丸の大きさを変えて描いた紙(右図参照)を幼児に示し、自分に当てはまると思う大きさの丸を指すようにした。



５歳児による自己評価の様子



５歳児自己評価の用紙

Ｂ　保護者による「自己評価シート」及び「他者評価シート」の実施

保護者に「他者評価シート」を依頼（６月、10 月、３月）するとともに、日頃の姿から子供はこのように評価するだろうと予想して、「自己評価シート」についても記入してもらった。

Ｃ　「自己評価シート」及び「他者評価シート」を分析し学級の傾向を把握

５歳児に実施した「自己評価シート」のほかに、担任が日頃の姿から捉えている一人一人の幼児について「他者評価シート」に記入・集計し、学級としての自尊感情の傾向を把握した。

３歳児研究保育

(ｳ) 研究保育及び研究協議会の実施

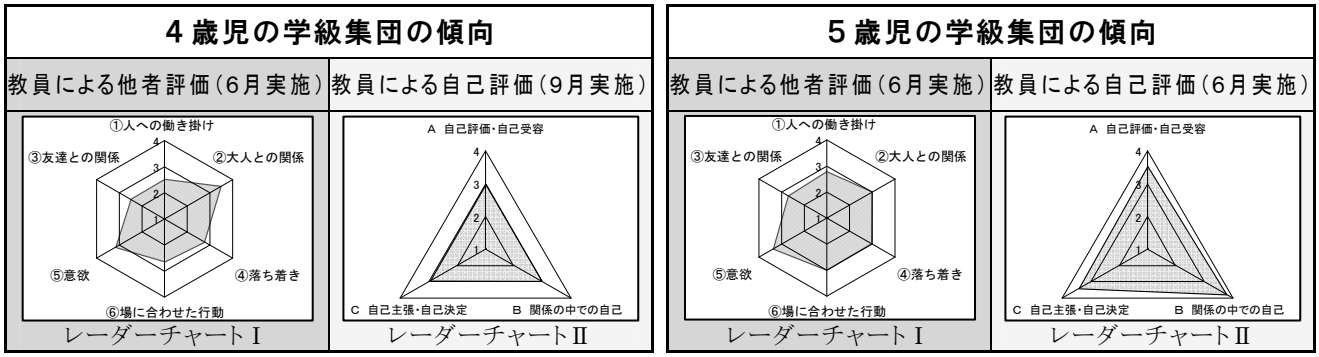
３歳児学級、４歳児学級、５歳児学級において研究保育を実施した。それぞれの学級において、自尊感情の傾向分析を基に対象幼児を設定して、その幼児の実態と教員の援助を観察記録し、自尊感情や自己肯定感を高めるために有効な教師の援助、環境の構成などの工夫について協議した。

３歳児の研究保育では、教師の他者評価において「②大人との関係」の数値が高いことから、教師との関係の中で、安定して自己表現できるようにした。一人一人の活動を取り上げ認めることで友達に親しみがもてるような援助を行った。

４歳児研究保育

４歳児の研究保育では、教員の他者評価において「③友達との関係」の数値が低いことから、自分の思いを友達に伝える、相手の思いに気付くことをねらいとし、友達と一緒に組み立てる巧技台の活動を通し、自分の思いを相手に伝える、友

達と協力して運ぶなど、友達と一緒に遊ぶ満足感を味わうことができるようにした。教師は友達の存在に気付かせる言葉を掛け、協力する機会を設けた。



４歳児及び５歳児の他者評価・自己評価

５歳児の研究保育では、教員による他者評価において、「①人への働き掛け」や「③友達との関係」の数値が低いこともあり、教員は幼児同士で関わりをもち力を合わせて取り組めるように援助した。実践できた時に「みんなでできた」と言葉にして認めることにより、力を合わせて行う喜びを感じられるようにした。

５歳児研究保育

なお、１年間の研究保育を通して大学教授等からの指導・助言を受け、研究を進めるとともに、教員の資質・能力の向上に努めた。

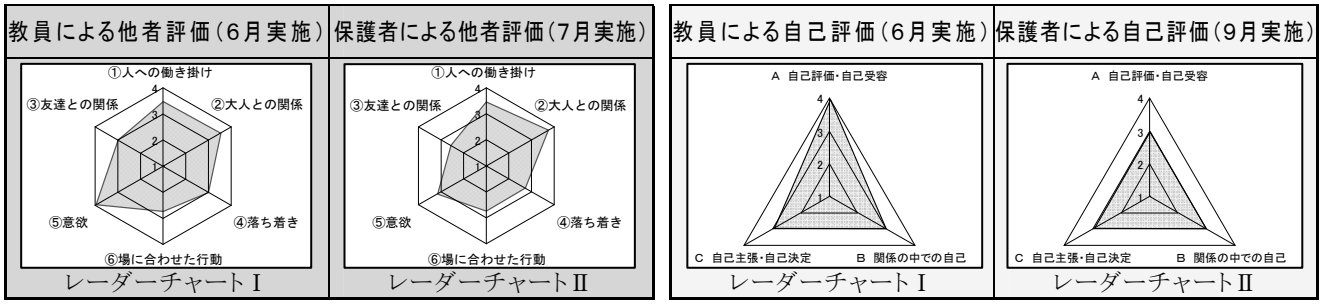
(ｴ) 研究報告会及び講演会の実施

平成 24 年 12 月 7 日（金）に、保護者や地域住民、園関係者を対象とした研究報告会と東京都教職員研修センターと共同研究を行った慶應義塾大学　伊藤美奈子教授による講演会を実施した。講演は、幼児期から青年期の自尊感情や自己肯定感の高まりについて、発達の支援の視点からの話であった。

また、保護者に向けて、幼児期に大切にしたい自尊感情や自己肯定感につながる大切な関わり方についての具体的な話があった。

保護者等を対象とした講演会

(ｵ) 保護者との連携



３歳児の自己評価・他者評価　※但し、3歳児については、教師及び保護者が3歳児に代わって行った自己評価シート

３歳児の「自己評価シート」及び「他者評価シート」は、教員の評価より保護者の評価が低い傾向であった。入園したばかりで保護者が幼児の園での生活に不安を感じているためと

考えられる。そこで、保護者との学級懇談会や個人面談において、入園してからの具体的な様子や成長した姿について話す際に、幼児の内面を客観的な数値やレーダーチャートを参考にして伝えることで、幼児理解や教育内容の共有化を図るとともに、効果的な指導方法を提示するなど具体的な子育て支援を行った。

保護者への説明

また、月末実施の次月分の「園だより」に記載している内容や、園・学級の指導方針を保護者に説明する機会を活用し、「自尊感情や自己肯定感を高めることにつながる」指導や幼児の姿をビデオ映像を見せながら伝えた。

エ　保護者・地域への普及・啓発

園だより配布時に、毎月の講話として、自尊感情や自己肯定感に関する幼児の姿やそれらを高める関わり方について伝えた。また、ホームページに研究に関わる幼児の活動の写真や園内研究の取組を掲載した。さらに、園の運営連絡会や運動会等の地域の方が参加する場で、九段幼稚園の研究の取組や講演会の実施等について紹介した。

保護者からは「このような指導が子供の自尊感情や自己肯定感を育てることにつながるのですね」、「子供が自信をもつようになってきました」など、自尊感情や自己肯定感に関する意見や感想が多く寄せられた。また、地域の方から自尊感情について関心を示す言葉が聞かれた。報告会当日は、保護者以外の地域の方も多数参加していた。

オ　成果と課題

＜成果＞

・　各学級担任が、自らの幼児の姿の捉え方や指導の傾向を客観的に振り返り、自尊感情や自己肯定感を高めるための援助や環境の構成について意識して指導に当たることができた。
・　自尊感情や自己肯定感を高める上で有効な異年齢の交流活動を計画的に行うことで、互いの存在を大切なものとして感じ合い、認め合う姿につながった。そのことで、自信や自己有用感等を感じて高め合う幼児の姿も見られるようになってきた。
・　保護者と連携し、「自己評価シート」、「他者評価シート」を活用することにより、保護者が我が子をどのように捉えているか把握でき、保護者への働き掛け方を工夫することができた。また、保護者が安心感をもち子供の姿の見方を広げる事例が見られた。
・　「自己評価シート」、「他者評価シート」の結果を合わせて見ることで、より明確に幼児の自尊感情の傾向を捉えることができた。

幼児の様子

＜課題＞

・　本年度は、「自己評価シート」を５歳児で実施した。さらに改善を加えて３・４歳児への使用を含め、活用方法の可能性を探る。
・　本研究に継続して取り組み、指導の改善や保護者・地域への普及・啓発に努める。

(2) 目黒区立五本木小学校

研究主題　「学びをつなげ　深め　広げる子供」

～　ＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）の考え方を生かして　～

ア　ねらい

目黒区立五本木小学校では、平成 22 年度からユネスコスクールとしてＥＳＤ（持続発展教育）に取り組み、全教育活動を通して「学びをつなげ　深め　広げる子供」の育成を目指して研究を行ってきた。これまでの成果として児童の自己肯定感を高めていくには、自分とは違う見方、考え方、感じ方に触れながら新しい視点で自分の考えを見直したり、深めたりする学習環境や場面を意図的に設定することが重要であることが分かった。今年度は、東京都教職員研修センターが開発した自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」等の研究成果を活用しながら、これまでの研究を深め、自尊感情を高めるための具体的な方法やその効果について検証することとした。

イ　方法

以下の五つの視点から研究を進めた。

(ｱ) ＥＳＤ（持続発展教育）の考え方を生かした取組

(ｲ) 自尊感情の傾向の把握と指導への活用

(ｳ) 「他者評価シート」を活用した児童の実態把握

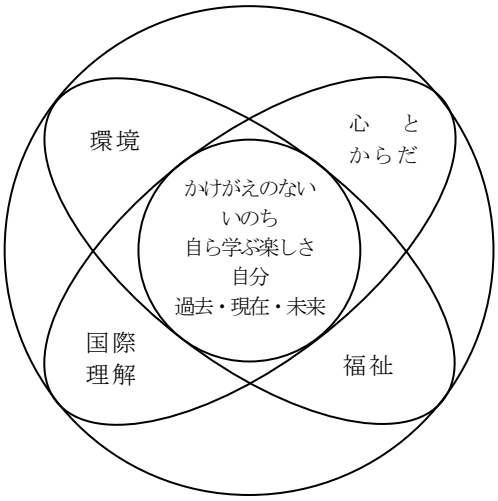
(ｴ) 低学年・中学年・高学年・通級指導学級の各分科会テーマに基づく校内研究授業

(ｵ) 公開研究発表会の実施

ウ　内容

(ｱ) ＥＳＤ（持続発展教育）の考え方を生かした取組

以下の４点を柱にして、考え方、生き方の学びを大切にし、行動につなげる「いのちのバトンをつなぐユネスコスクールの子供（持続可能な社会の担い手）」の育成を図る。



研究イメージ図

Ａ　各教科で得た知識や技能などを相互に関連付け、学習や生活に生かそうとする子供の育成

各教科の基礎的・基本的な内容の定着を図りながら、総合的な学習の時間を中心に全教育活動を通じて、子供自らがそれを活用するような学習環境や場面を意図的に設定することで、学びにつなげ、深め、生かすことのよさに気付くようにし、自ら学ぶ力を身に付けていくようにした。その際、学びをより深めていくための具体的な手だてを自尊感情や自己肯定感の視点を踏まえながら工夫した。

Ｂ　他者と協働し、自ら問題を解決しようとする子供の育成

他者との関係性の中から新たな学びが生まれてくる学習形態を工夫し、自尊感情や自己肯定感を「指導方法」で高めることに留意して、意図的に他者と学び合う学習場面を設定した。そして、自分とは違うものの見方、考え方、感じ方に触れながら新しい視点で自分の考え方を見直したり、深めたりする力を身に付けていくようにした。

Ｃ　生活や地域、社会、自然、環境、世界等とつながる子供の育成

地域の環境や人、もの、ことについて自尊感情や自己肯定感を「学習内容」で高めることに留意して、教材化や題材化することにより、子供一人一人がかけがえのない存在として、様々な人たちと共に生きていこうとする資質や態度を養うようにした。

Ｄ　いのちのつながり、自分とのつながり、人とのつながりを大切にする子供の育成

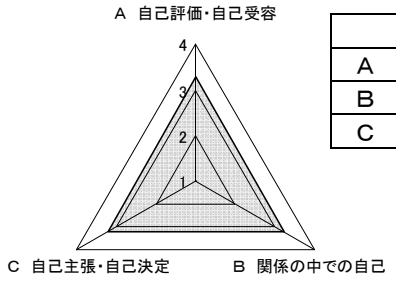
命や環境などを個人、グループ、学級で考えることを通して、感謝の気持ちがもてる、自分のよいところに気付ける、相手の思いを想像できる、命を大切にできる、「つながり」や「関わり」を大切にできる、自己肯定感をもてる子供を育むようにした。

(ｲ) 自尊感情の傾向の把握と指導への活用

Ａ　「自己評価シート」の活用による分析

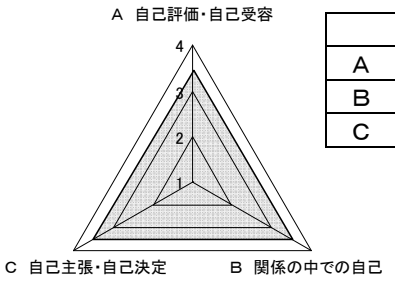
「自己評価シート」を複数回実施し、個人・学級・学年・学校の自尊感情の傾向をレーダーチャートで把握し、日常の指導に生かした。５月の時点では児童の自尊感情の傾向は、「Ｂ　関係の中での自己」が高くなるⅡのタイプが多かった。そこで、授業において自分のよさが感じられる場面や機会を意図的に設定するようにしたことで、１年間の教育活動全体を通して、自尊感情の３観点をバランスよく高めることができた。

４年生（５月）



	４年
Ａ	3.38
Ｂ	3.33
Ｃ	3.29

４年生（11 月）



	４年
Ａ	3.48
Ｂ	3.50
Ｃ	3.56

学校全体の自己評価シートの結果（５・11 月実施）

Ｂ　「自己評価シート」結果の活用

自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点をＥＳＤの取組と関連付け、「五本木ＥＳＤカレンダー」の中に設定した。そして、教育活動全体で、自尊感情を構成する３観点のバランスを考えた教育活動を意図的・計画的・継続的に実施した。

各教科等	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10 月	11 月	12 月	１月	２月	３月
国語		生き物はつながりの中に 観点B			伝えられてきたもの 観点A			平和のとりでを築く 観点C				
		短歌俳句 観点A								書き初め 観点A		
社会		大陸に学んだ国づくり 観点B				戦争と人々の暮らし 観点B		日本とのつながり 観点B		世界の人々と共に生きる 観点C		
								平和で豊かな暮らしを目指して 観点C				
算数		文字と式 観点C								立体の体積 観点A		
理科		ものの燃え方と空気 観点C			大地のつくりと変化 観点B				生物のくらしと環境 観点B			
総合的な学習の時間		地域に残る歴史的なもの 観点B			これぞ日本（日本の伝統文化） 観点A			世界とつながる私たち 観点A・B				
		ピアサポート 観点B			自然や歴史にふれあおう（宿泊体験）					平和について考えよう 観点A・B		

第６学年「五本木ＥＳＤの取組」と「自尊感情や自己肯定感の観点　Ａ【自己評価・自己受容】Ｂ【関係の中での自己】Ｃ【自己主張・自己決定】」の関係（例）

(ｳ)「他者評価シート」を活用した児童の実態把握

ゆりのき学級（特別支援学級）において、友達と共に活動することを楽しむことを目的にして、心身を落ち着かせる運動や、ゲーム的な活動に取り組む際に、「自己評価シート」に加えて「他者評価シート」を活用して子供たちの姿を把握した。

(ｴ) 低学年・中学年・高学年・ゆりのき各分科会テーマに基づく校内研究授業

分科会ごとに、ＥＳＤの考え方と自尊感情や自己肯定感を高める視点を明確にして研究授業・協議会を実施し、指導の改善を図った。

Ａ　低学年分科会　図画工作研究授業「とろとろえのぐで」（第２学年・６月実施）

(a) ＥＳＤの考え方と自尊感情や自己肯定感を高める視点

形や色、イメージを介して自分の思いや考えを実現させていく過程を通して新しい自分や世界をつくり出した。また、よさや個性を実感できる活動を通して、自尊感情の「Ａ　自己評価・自己受容」の観点が高まった。

第２学年　図画工作

(b) 児童の姿（児童の変容や気付き）

一人一人が「とろとろえのぐ」を使って自分の思いや考えを表現し、様々な試みの過程で生まれてくる形や色から、一人一人のイメージがつくり変えられていた。

Ｂ　中学年分科会 道徳研究授業「人権の花を咲かせよう」（第４学年・６月実施）

(a) ＥＳＤの考え方と自尊感情や自己肯定感を高める視点

自尊感情「Ｂ　関係の中での自己」の観点を高めるために、友達のよさや違いに気付き、認め合うことが、児童同士のよりよい関わりやつながりを育んだ。

第４学年　道徳

(b) 児童の姿（児童の変容や気付き）

友達のよさを見つめ、関わり合うことによって互いの違いに気付き、認め合う雰囲気が醸成された。

Ｃ　高学年分科会 総合的な学習の時間研究授業「過去から未来へ～現在を見つめて～」（第５学年・７月実施）

(a) ＥＳＤの考え方と自尊感情や自己肯定感を高める視点

自尊感情「Ｃ　自己主張・自己決定」の観点を高めるために、参加体験型の学習を行うことで、一人一人の「気付き」や「思い」を大切にしたディスカッションを通して、持続可能な社会に生きるための使命を自覚できるようになった。

第５学年　総合的な学習の時間

(b) 児童の姿（児童の変容や気付き）

思考の過程の大切さに気付き、自分の意見を堂々と述べることができるようになった。また、様々な考え方や意見を交換（対話）できたことで、友達の意見を聞く態度に変化が見られた。

(ｵ)　公開研究発表会の実施

平成 24 年 10 月 26 日（金）公開授業及び研究発表会を行った。五本木小学校のＥＳＤ「人と自然と自己との関係を編み直す」というテーマのもと、各学年が「答えのない＜問い＞を考える」ことを通して、自尊感情や自己肯定感を高める授業が実践された。その後の研究発表会では、ユネスコスクールである五本木小学校が進めるＥＳＤの基本的な考え方、本校の自尊感情や自己肯定感の傾向について、授業実践や各学年の取組等についての報告と大学教授による講演を行った。

第５学年　総合的な学習の時間

エ　保護者・地域への普及・啓発

研究発表会を保護者・地域に公開し、第１学年は保育園児との関わり、第２・３・４学年は地域との関わりを学習材とした。また、第５・６学年は保護者や地域の方々をゲストティーチャーとして招き、学習を行った。授業公開に参加していた保護者から、「先生や親以外の多くの大人から認められたことが子供の自信になっているようである」との感想があった。

オ　成果と課題

＜成果＞

・　ＥＳＤの研究に「自尊感情や自己肯定感を高める教育」を関連させて研究を進めたことで、児童一人一人が友達と共に学ぶ楽しさを味わい、自信をもちながらチャレンジし、自分を表現していこうとする姿が見られた。

・　自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」を３回実施し、各教科等を通して、児童の実態を踏まえた指導を行った。教員が自尊感情の３つの観点や児童の自尊感情の傾向を意識して指導するようになった。その結果、３つの観点をバランスよく高めることができた。

・　「五本木ＥＳＤカレンダー」に自尊感情の３つの観点を年間を通して位置付けることにより、ＥＳＤと自尊感情の関わりを明確にするとともに、意図的・計画的・継続的に自尊感情や自己肯定感を高める取組を教育活動全体を通して展開することができた。

＜課題＞

・　児童が主体的に学びを創造し、自他共に大切にする心を育めるように、学校、家庭、地域が一層連携し、社会の担い手を育成する教育活動を実践していくようにする。

・　今後も児童の自尊感情や自己肯定感を高めることを学校全体で大切にしながら、日常行われる各教科や道徳などの指導や特別活動を展開していく。

・　自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」を継続して実施し、より詳細に分析することにより、児童の自尊感情の経年変化や成長を見ていく。

(3) 町田市立町田第五小学校

研究主題　「自尊感情や自己肯定感を高め、進んで実践しようとする子供の育成」
～人権教育の視点を踏まえた道徳の授業を通して～

ア　ねらい

町田市立町田第五小学校は、平成 22 年度より「豊かな心をもち、自ら考え、進んで実践しようとする子供を育てる」を研究主題として、道徳の時間を要として心の教育を充実させる研究を進めてきた。平成 22・23 年度は児童や保護者・地域の実態から、人権教育の視点を踏まえることがさらに道徳教育の内容を深化させることにつながると考え、「人権教育の視点を踏まえた道徳の時間の創造と特色ある教育活動の推進」を副主題とした。そして、各教科、総合的な学習の時間、特別活動との関連を明確にした全体計画及び年間指導計画の作成と授業実践を主とした研究を行った。

今年度は以上の研究経過を基盤に、児童の実態から新たに自尊感情や自己肯定感を高める指導の視点を入れた実践を意図的に行いたいと考え、上記研究主題を設定し、研究に取り組むこととした。

イ　方法

(ｱ) 自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」による現状把握と分析、考察

(ｲ) 研究授業の実施

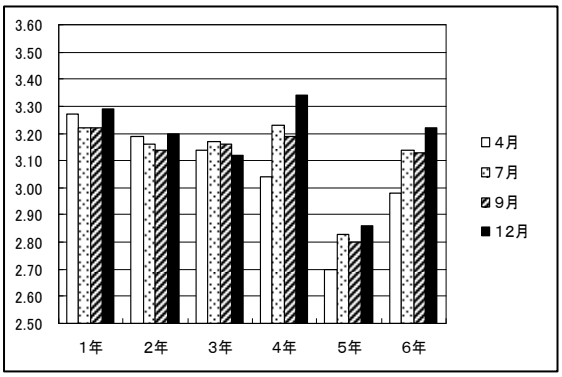
- 意図的な年間指導計画～自尊感情や自己肯定感を高めることに重点を置いた道徳の年間指導計画の作成等
- 指導の工夫と実践～自尊感情や自己肯定感を高めることに重点を置いた道徳の授業実践

(ｳ) 保護者・地域への普及・啓発

ウ　内容

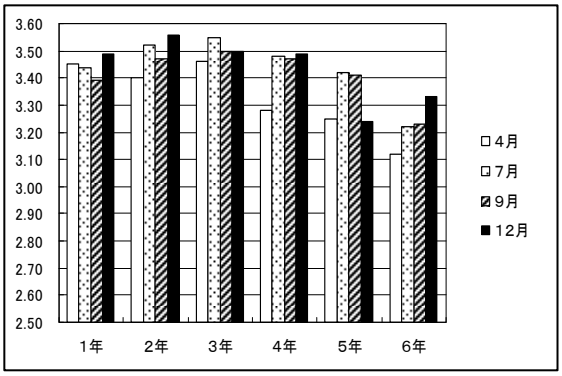
(ｱ) 自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」による現状把握と分析、考察

「Ａ　自己評価・自己受容」の観点は、学年が上がるにしたがって数値が低くなっている。しかし、第６学年の数値は４月から７月にかけて大きく向上している。これは、第６学年として毎日行っている清掃等奉仕活動での「自分のよさ」を意識させた取組を継続した成果と考えられる。また、４月から 12 月への数値の向上は、全校で取り組んできた「自分のいいところみつけ」の活動の成果と考えられる。



Ａ　自己評価・自己受容

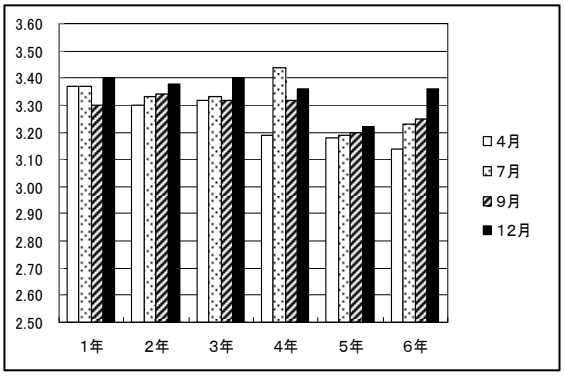
「Ｂ　関係の中での自己」は、ほぼ４月より 12 月の方が数値は高い。町田第五小学校は、毎年学級編成があり、４月当初は友達同士の人間関係が十分に成り立っていないことが起因していると考えられる。



Ｂ　関係の中での自己

ただし、第３学年が特に高いのは、気の合う友達の関係を重視し、他者との関係を大切にしていこうという意識が表れていると推測できる。

「Ｃ　自己主張・自己決定」においては、各学年とも４月から 12 月にかけてほぼ上がっている。取組の工夫として、話合い活動を通して自己の意見を言う機会を意図的に設けたこと、一人一役など自己決定の場を多く設けたことなどが考えられる。



Ｃ　自己主張・自己決定

(ｲ) 研究授業の実施

Ａ　意図的な年間指導計画

道徳の年間指導計画に「自尊感情や自己肯定感を高めることを重点とした時間」を位置付け、それぞれの時間に重点的に扱うようにした。また、自尊感情や自己肯定感を構成する３観点の中の小観点を明記し、授業を行う際の留意点を意識できるようにした。例えば右の表では枠内を「自尊感情や自己肯定感を高めることを重点とした時間」とし、４月の「キャプテンとして」という題材では、【Ｂ－③】貢献意欲の小観点を位置付けている。

さらに、学習指導案には「人権教育の視点に立った自尊感情や自己肯定感を高めるための視点」を入れた。例えば、11 月の題材である第６学年「お母さんへの手紙」では、小観点を【Ｂ－④】支えの気付きを位置付け、学習指導案には下記のように表している。

【年間指導計画】

	４月	５月	６月	７月	９月
第６学年	「キャプテンとして」 4－(3) 人の役に立っていることや、学級全体のことを考えて、工夫して活動できたことを認められるようにする。 【B-③】 ☆「命の重さはみな同じ」 3－(1)	「散らかし魔」 1－(1) 自分で決めた決まりを守ろうとする。 【B-⑤】 ☆「土石流の中で救われた命」 2－(5) 「小さい子からもらった幸せ」 4－(4) 「白神山地」 4－(7)	「手品師」 1－(4) 自分たちで作った組織のきまりを自主的に守って活動する。 【C-①】 「けいたい電話を持たせない」 1－(1) ☆「修学旅行の夜」 1－(3)	☆「言葉のおくりもの」 2－(3) 友達の存在が学校生活を充実させていることに気付く。 【B-④】 「愛華さんからのメッセージ」 3－(2) 「うちら“ネコの手”ボランティア」 4－(4)	「江戸しぐさ」 2－(1) 自分で決めた決まりを守ろうとする。 【B-⑤】 「ピアノの音が…」 4－(1) ☆「車いすでの経験から」 2－(2) ☆「おばあちゃんのさがしもの」 4－(5)
	10 月	11 月	12 月	１月	２月	３月
	「せんぱいの心を受けついで」 4－(6) 一人一人の活動は周りの人の助けがあって成り立っていることに気付く。 【B-④】 「『あの日のわたし』と『今のわたし』」 4－(3) ☆「義足の聖火ランナー」 4－(8) ☆「白旗の少女」 4－(8)	☆「お母さんへの手紙」 3－(1) 他者の大きな支えの中で自分が存在していることに気付く。 【B-④】 ☆「明日香と弥生」 2－(3) ☆「ぼくは後悔しない」 4－(2) 「銀のしょく台」 2－(4)	☆「夢をつかまえよう」 1－(2) 自分の将来について考え、目標をもって取り組む。 【C-③】 「青の洞門」 3－(3) 「『すんまへん』でいい」 1－(1)	「神父さまはマスクマン」 1－(2) 将来について考え、希望が持てるようにする。 【C-③】 ☆「東京大空襲の中で」 3－(2) 「夜空～光の旅」 3－(3)	☆「あこがれのパティシエ」 1－(6) 自分の長所を知り、積極的に伸ばしていこうとする。 【A-④】 「空きかんのゆくえ」 4－(1) 「森に生きる」 3－(1)	「心に通じた『どうぞ』のひとこと」 2－(2) 他者との温かな関係を築いていこうとする。 【B-③】 「新しい日本に」 4－(6)

【学習指導案の中に視点を位置付け】

人権教育の視点に立った、自尊感情や自己肯定感を高めるための視点

- 生命の尊重に気付かせ、生命を大切にしようとする心情を育てる。
- 生命は、他者の大きな支えの中で存在していることに気付き、今を精一杯に生きようとする心情を育てる。

Ｂ　指導の工夫と実践

町田第五小学校では、次の４本の柱に全学年を通して取り組むこととした。

(a) 資料の工夫

自尊感情や自己肯定感を高めることを指導の重点としたことにより、それに関する資料を選択したり、資料の視点を明らかにしたりした。特に資料提示については、児童が資料に興味・関心をもち、自尊感情や自己肯定感が高められるように工夫した。例えば、竹の子学級（特別支援学級）の授業では、「相手を意識した言葉のやりとり」を経験できることを重視し、道徳で学んだ後、実生活で他者との関係を良好にすることができる言葉に気付かせる資料を選んだ。

竹の子学級「パネルシアター」

(b) 発問の工夫

第３学年の「ゆうひの中を走るライオン」の学習では、発問の工夫により、登場人物の心情の変化を読み取らせ、多くの友達の意見を聞き合う経験をさせた。友達の意見を聞き、他者への配慮や思いを考えられるようになることが期待できる。それは、学校行事や体験的活動を通して、友達との人間関係がより豊かで、親密になり、自分の立場からだけではなく、相手の立場を考える上で、全体を構成することや内容や言葉を工夫させ、児童が自分との関わりの中で考えることができる学習活動へつながるようにした。

教師の発問の工夫

(c) 表現活動の工夫

表現活動を「児童が自分の考えを表現する学習活動」と定義し、児童の考えを深める話合い活動や書く活動、動作化や役割演技等の活動を発達段階や資料に合わせて工夫した。

考えを友達に聞いてもらおう

表現活動を充実させることにより、道徳的価値についての自覚を深めさせたり、自分との関わりの中で考えを深めたりすることができると考えた。第４学年「バルバオの木」の学習では自分の意見を多数の児童に伝える活動を設定したことで、友達に自分の意見を聞いてもらうことができ、自信をもつことができた。第２学年の「さやかさんのおにぎりづくり」の学習ではワークシートに家族のためにできたことやそのときの気持ちを書かせることで家族を大切に思う気持ちに気付かせることができた。家族のためにできたことを認めることで、「Ｂ　関係の中での自己」の観点を高めることができたと考えられる。

(d) 板書の工夫

板書を児童の思考を深める重要な手掛かりと考えるだけではなく、資料の位置や内容の中心部分の位置も工夫し、自尊感情や自己肯定感が高められるきっかけになるようにした。

第２学年「さやかさんのおにぎりづくり」の学習では、中心発問の際に、笑顔の家族の挿絵を提示することで、家族の愛情を感じ取れるようにした。そのことで、家族の一員として、役に立てることをやろうとする心情に触れることができたと同時に、家族と自分の関係を考え、自分が家族の一員であることを実感できたのではないかと考える。

板書の工夫

エ　保護者・地域への普及・啓発

自尊感情や自己肯定感を高めていくためには、教育活動について、地域・家庭に協力を求め、共に子供を育てていくことが大切である。町田第五小学校では、児童が道徳の授業で考えたことを家庭で話題にし、考えを深めていけるよう、授業で活用したワークシートをファイルにまとめて家庭に持ち帰るようにしている。また、学校だよりや学年だよりに自尊感情を高めるための取組を掲載したり、道徳の研究授業で、保護者に参観してもらう場を設けたりした。

道徳授業地区公開講座

オ　成果と課題

＜成果＞

- 道徳の授業において、人権教育の視点に立った自尊感情や自己肯定感を高める視点を明確にして指導事例を積み重ねることができた。
- 自尊感情や自己肯定感に関する児童の現状把握を行い、適切な働き掛けを行うことで、児童の自尊感情や自己肯定感を高めることができた。
- 自尊感情をイメージとして捉えるのではなく、「自己評価シート」を用いることで、３つの観点から客観的に捉えることができ、それを基に、児童が学んだことや日常生活のおいて取り組んだことに自信をもつことができるよう、指導を工夫し、効果を上げることができた。
- 自尊感情や自己肯定感を高めることを重点に置いた道徳の指導計画を作成することで、意図的・計画的に指導することができた。

＜課題＞

- 「自己評価シート」を今後も継続的に活用することを通して自尊感情の傾向を発達とともに把握し、児童の指導資料として日常的に活用すること。
- 道徳以外の各教科等について、自尊感情や自己肯定感を高める視点を明確にした授業実践と指導計画の作成をすること。

(4) 小平市立花小金井南中学校

研究主題　「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育の推進」
～授業や特別活動を通して～

ア　ねらい

小平市立花小金井南中学校の生徒は、学習への意欲も高く、授業や行事、部活動にも意欲的に取り組んでいる。しかし、保護者・地域からは、「おとなしい」、「活気がもう少しあるとよい」との声も聞かれていた。この課題を解決するために、東京都が定義した自尊感情に基づく３つの観点（Ａ　自己評価・自己受容、Ｂ　関係の中での自己、Ｃ　自己主張・自己決定）を通して、生徒が自己の評価をすることにより、自尊感情や自己肯定感を高め、自信をもち、心を強くしてたくましく生きる力につなげることができると考えた。

イ　方法

(ｱ)　教員の研修会の実施

・　自尊感情や自己肯定感を高める３つの観点についての研修の実施

(ｲ)　自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」による生徒の現状把握と分析・考察の実施

・　５月、６月（運動会後）、11 月（合唱コンクール後）に実施

(ｳ)　研究授業の実施

・　自尊感情や自己肯定感を高めることに視点を置いた指導方法の検討及び学習指導案の作成

・　研究授業は、第１学年は７月、第２学年は２月、第３学年は 10 月に実施

(ｴ)　学校行事での取組

・　学校行事の内容の工夫及び事前・事後指導を含めた自尊感情や自己肯定感を高める指導の実施

(ｵ)　保護者・地域への普及・啓発

・　道徳授業地区公開講座で、全学級の道徳の授業を公開し、研究で取り組んできたことについての発表を行うとともに、年間４回、学校便り「花南だより」で自尊感情・自己肯定感を高める教育の推進に関わる内容について記載した特別号を発行

ウ　内容

(ｱ)　教員の研修会の実施　【平成 24 年５月９日（水）】

自尊感情や自己肯定感を高める３つの観点について、理解を深めるため研修を行った。東京都教職員研修センター統括指導主事、指導主事からの説明後、事前に行った生徒の「自己評価シート」の結果を基に、活発に協議がなされた。学級や学年での平均を見ると、グラフは３つの観点のバランスがよい正三角形となるが、個々の生徒の結果は、三角形の形が様々であった。

校内研修会　研究主任による概要説明

協議では、全体の傾向を見ていくことも大切であるが、生徒一人一人の三角形の大きさやバランスによって配慮していくことが必要であるという意見が出た。生徒に対する、より一

層の教員の声掛けや手だてが必要であるとの共通の認識へとつながった。

(ｲ)　「自己評価シート」による生徒の現状把握と分析・考察の実施

「自己評価シート」は継続的に実施することとし、行事の後には「自己評価シート」による調査を実施した。継続的に調査を実施し、集計をするためにマークシート用紙を活用して「自己評価シート」を作成し、その活用方法についてのマニュアルを学校独自に作成し、どの教員も調査及び集計がしやすくなるように整備した。年３回実施した。

(ｳ)　研究授業の実施

授業研究は、年３回（７月、10 月、２月）実施した。校内研修会での協議を受けて、学習指導案を作成する際には「自尊感情を高めるために工夫したところ」、「自己評価シート」の結果として三角形の大きさから表れた「自尊感情の傾向の低い生徒への働き掛け」を記載し、学習指導において自尊感情を高める手だてを教員が意識して行えるように工夫した。授業者からは、視点を明確にしたことで、机間指導の際に確実に声を掛けることや、生徒が意見等を発表した際に自信を高められるような言葉掛けをすることができたとの声が上がった。また、視点を記載したことで、授業を参観するポイントが明確になり、研究授業後の協議会でも、各指導者が示した点について、実際の指導がどうであったか、また、生徒の様子、改善点について活発に意見が交わされた。個々の生徒に対する指導についても、教科を越えて共通した指導を行う視点を教員がもつことにもつながった。

研究授業　第１学年　美術

(ｴ)　学校行事での取組

Ａ　運動会　【平成 24 年６月 10 日（日）】

今年度から、生徒会役員が生徒会種目の競技の企画・運営を行い、競技を実施した。生徒会役員の生徒が自主的に運営する機会を設け、自分たちの取組が実現する体験を通して、自尊感情を高めることをねらうとともに、他の生徒にも生徒による企画・運営に携わるよさを知る機会とした。

また、各学級では、学級の皆が関わる全員リレー、学年種目、応援合戦などについて、当日に向けて生徒が話合いを重ね、それに教員も加わって働き掛けを行い、学級の全員が参加するよさ、皆で力を出し合い取り組むよさを経験した。また、教員は、５月に実施した「自己評価シート」の結果から、自尊感情の傾向の低い生徒に対して、意識的に励まし等の声を掛けたり、実行委員などの担当を行うよう促したりする働き掛けを行った。

運動会　開会式

Ｂ　合唱コンクール　【平成 24 年 11 月２日（金）】

合唱コンクールに向け、各学級とも金賞を目指し、音楽の授業のみならず、放課後に練習を重ねて本番を迎えた。練習においては、運動会と同様、担任が直接指導するのではなく、実行委員への働き掛けを行い生徒達だけで取り組めるよう指導した。発表では、どの学級も真剣に歌う姿が見られた。また、全学年の「有志による合唱」では、特に第３学年は生徒の９割以上が参加し、舞台に入りきれないほどの生徒が歌っていた。「合唱」を通して、自己実現を図る姿が見られた。

合唱コンクール

エ　保護者・地域への普及・啓発

道徳授業地区公開講座及び研究発表会

【平成 24 年 10 月 29 日（月）】

全学級の道徳授業公開と４月から取り組んできた研究の内容の発表及び講演が行われ、保護者・地域に本校の取組を周知する機会とすることができた。

(ｱ) 道徳授業地区公開講座の授業

学年・学級	テーマ	資　　料
第１学年	人間愛	「雪にうもれたＡＲＩＧＡＴＯ」（自作資料）
第２学年	伝統の継承と文化の創造	「日本人の心の歌を求めて―滝　廉太郎―」 （東京都道徳教育教材集「心みつめて」東京都教育委員会）
第３学年	信頼できる友達	「友達関係って……」 （「中学校道徳３　明日をひらく」東京書籍）
特別支援学級	高め合う友情	生徒作文（花小金井南中学校　７組生徒作文）

道徳の学習指導案には、「自尊感情や自己肯定感を高めるための視点」、「自尊感情の傾向の低い生徒への働き掛け」の項目を設定した。また、本時の展開では、「自尊感情、自己肯定感を高めるための指導上の留意点」を明記し、本時を通してどのように「自尊感情や自己肯定感」を高めていくかを明確に位置付けて指導を行った。

道徳授業公開　第２学年

(ｲ)　研究発表及び講演

研究発表では、「生きる力」を育む観点から「知・徳・体」の「徳」の部分で「自己評価シート」を活用した自尊感情を高める取組や、研究の流れ、自尊感情の観点別の推移、成果などが発表された。研究発表後は、東京都教職員研修センター研修部教育開発課長が、本研究の取組と、日本の子供たちの自尊感情の特徴や他者との関わりの中から自尊感情を育むことなどについて講演を行った。

研究発表

オ　成果と課題

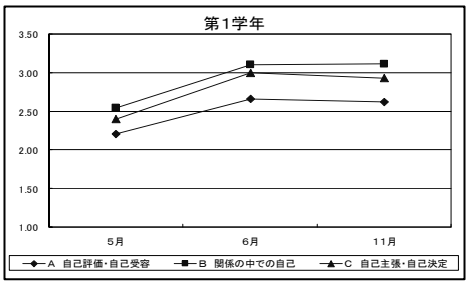
＜成果＞

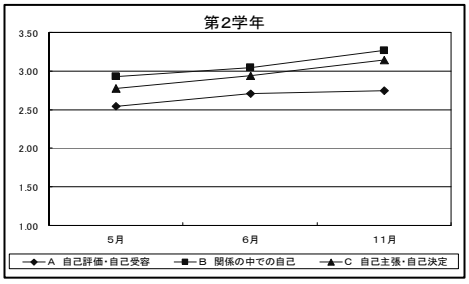
(ｱ)「自己評価シート」の分析から

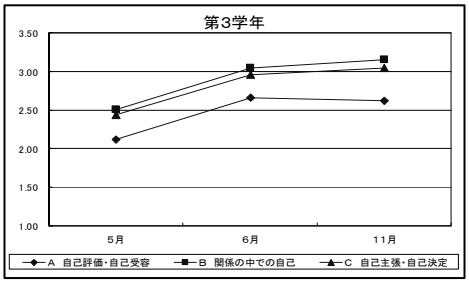
Ａ　各学年の分析から

５月、運動会後の６月、合唱コンクール後の 11 月に「自己評価シート」を実施した。自尊感情の３つの観点について、各学年の平均の数値を出し、生徒の自尊感情の変容を分析した。その結果、全学年、５月よりも自尊感情の３観点とも向上が見られた。特に、「Ｂ　関係の中での自己」は、行事を重ねるごとに上昇している。

このことから、「自己評価シート」によって、学年全体及び個人の自尊感情の実態を把握し、行事の内容を工夫したり、教師が自尊感情を高める視点で、声掛けや助言を行ったりすることにより、生徒の自尊感情の向上につながることが分かった。



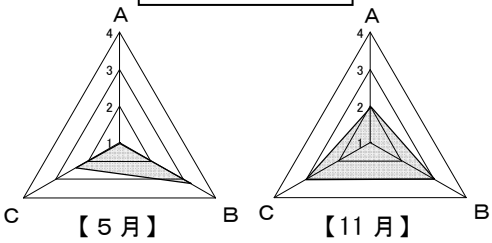




Ｂ　自尊感情の傾向の低い生徒の分析

自らは立候補しないが、学級の班長に推薦で選出されていた生徒に対し、担任はその事実を「あなたが学級で信頼を得ている結果である」と本人に伝え続けた。運動会では広報担当の係を務め、３年生であることからリーダーシップをよく取っていたこの生徒は、右のように５月と 11 月を比較すると「Ａ　自己決定・自己受容」は、1.00 から 2.13 に、「Ｃ　自己主張・自己決定」は、2.43 が 3.29 へと上昇した。

第３学年男子の例



(ｲ) 研究授業を通して

研究授業から、集団及び個々の生徒の自尊感情の実態について共通の認識をもち、情報を共有化することができた。研究授業後の協議会で話し合われたことを基に、日常の授業においても教員が自尊感情を高める視点を意識した授業展開や生徒への言葉掛けを行うことができた。教員が自尊感情を高める視点を意識することによって、生徒の自尊感情の向上につながることが明らかになった。

(ｳ) 保護者・地域への普及・啓発

道徳授業地区公開講座及び研究発表を通して、保護者・地域への花小金井南中学校の取組を発信することができた。また、年４回の学校便りの特集号では、グラフなどを用いて具体的に取組を紹介したことで、授業や特別活動（学校行事）を通しての生徒の変容について理解・啓発を行うことができた。

＜課題＞

・　「自己評価シート」の結果を継続的に確認し、一人一人の自尊感情の実態について把握し、指導に生かしていくこと。

・　自尊感情や自己肯定感を高める取組について、さらに家庭・地域に発信していくこと。

(5) 清瀬市立清瀬第三中学校

研究主題　「学力向上につなげる自尊感情や自己肯定感を高めるための教育」

ア　ねらい

清瀬市立清瀬第三中学校では、生徒の学力向上を重要な教育課題として捉え、基礎的・基本的な学力を身に付けさせるため、教師の授業力向上と、少人数学習の推進による個に応じた指導の充実に取り組んでいる。その中で、教師の授業力を向上させる重要な要素として、各教科等における自尊感情や自己肯定感を高める指導を本校の年間を通した取組として設定した。そして、「自信　やる気　確かな自我を育てるために　－子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料－　【発展編】（平成 24 年３月　東京都教職員研修センター）」に述べられている、自尊感情や自己肯定感を高める取組の「学習内容で高める取組」と「指導方法で高める取組」を計画的、継続的、組織的に行うことにした。具体的には、自尊感情や自己肯定感の醸成に関連の深い学習内容を習得させたり、学習を通して他者との関係の中から学ぶよさを感じさせたりすることを計画的、継続的、組織的に行うことである。これらの取組により、生徒に自信をもたせ、学習意欲を高めながら学力向上につなげていくことをねらいとした。

また、清瀬市内全小・中学校で行われている「命の教育」との関わりの中で、清瀬第三中学校の教育目標である「人間尊重の精神を基盤とし、希望に満ちた社会をめざす健康で明るく知性ある人間を育成する」を達成するための教育の一つの在り方として、本研究の普及・啓発に取り組むこととした。

イ　方法

以下に示す方法をとりながら、生徒が行う自己評価（５月、９月、11 月の３回）及び保護者が行う他者評価（12 月）を実施し、生徒の自尊感情の変容の分析を行う。

(ｱ) 自尊感情を高めることを視点に位置付けた授業改善

- 「学力向上」に向けた授業改善と、教科指導における自尊感情や自己肯定感を高めるための視点の導入
- 清瀬市立清瀬中学校（平成 23 年度「自尊感情や自己肯定感を高めるための教育」研究協力校）の教員による研究授業の実施

(ｲ) 特別活動における自尊感情を高める取組

- 「命の教育」推進全体計画に指導目標として自尊感情や自己肯定感を育む視点を設定
- 赤ちゃんのチカラ・プロジェクト
- 合唱コンクール

(ｳ) 保護者・地域への普及・啓発

- 保護者向け講演会の実施
- スクールカウンセラー、東京都教職員研修センター指導主事による「自尊感情や自己肯定感を高めるための教育」についての講演会の実施

ウ　内容

(ｱ)「自尊感情を高めること」を視点に位置付けた授業改善

生徒の自尊感情を高めることは学習意欲の向上と関連すると考え、普段の授業の中で分かる授業を行い、生徒に自信をもたせることで、自尊感情の醸成を目指した。

取組では、平成 23 年度の研究協力校であった清瀬市立清瀬中学校の教員による研究授業を参観し、生徒の意見を引き出す発問や生徒の意見を共感的に受け止める言葉掛けなどの指導技術や授業づくりについて学び、清瀬第三中学校における授業改善の視点とした。

また、授業改善を進めるために、非常勤の教員を含めた全教員が公開授業を実施し、自尊感情や自己肯定感を高める視点を指導上の留意点に掲げるようにした。美術の公開授業では、話合いや発表等の活動を位置付け、生徒が互いのよさを認め合う取組を行った。作品を通じて他者と考えを交流させ、互いに学び合うことを経験させる中で、互いの表現のよさや個性等を認め合うことができていた。発表等の言語活動を効果的に用い、美術としてのねらいを達成する中で、他者との関わり合いから分かる授業づくりと自尊感情を高める工夫を行った。

清瀬中学校の教員による研究授業

授業計画においては、分かる授業づくりを目指し、生徒の関わりや主体的な活動を促すために、言語活動を授業の軸とした。生徒の自尊感情を高めるために、「自信やる気　確かな自我を育てるために」の「自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点」に基づいて学習指導案に指導上の留意事項を明記し、分かる授業を基盤とした自尊感情を高める授業改善を行った。

話合いの様子（美術）

(ｲ) 特別活動における自尊感情を高める取組

Ａ　赤ちゃんのチカラ・プロジェクト

このプロジェクトは、生徒の自尊感情を高める取組として、清瀬市がＮＰＯ法人と連携して進めている取組である。「自尊心をもつことが大切な思春期に、赤ちゃんについて知り赤ちゃんと触れ合うことで、自分も慈しまれて育てられていることや命の大切さを学ぶこと」を目的の一つにしている。

赤ちゃんとの触れ合い

第３学年を対象として行われた当日の活動では、初めに子供の成長について学習し、人形を使って赤ちゃんの抱き方の練習を行った後、実際に赤ちゃんと触れ合った。その触れ合いでは、どの生徒も笑顔を浮かべ、楽しそうに活動に参加していた。友達との関わりが得意でない生徒も、赤ちゃんを通じて他の生徒と関わることができていた。

Ｂ　合唱コンクール

合唱コンクールでは、「意欲や自主性を高め、協力し合う」という目標に向けた取組から自分を肯定的に捉えたり、学級集団の仲間たちとの関わりから自分の存在感に気付いたりすることで自尊感情を高めることを目指した。

合唱コンクールで賞を受け取る生徒

また、大人からの声掛けとして、審査員の外部講師からは、講評の中で意図的に一学級ずつ評価していただき、各学級の取組の価値付けを行った。

さらに、学区内の小学校６年生を招き、合唱を聞いてもらったり、一緒に歌ったりした。合唱コンクール後には、小学生一人一人から感想の手紙をもらい、それを廊下に掲示した。手紙には、「小学生の私たちとは違い、かっこよかった」や「早く中学生になって先輩たちのように歌ってみたい」などの感想があった。

生徒の作文の内容や合唱コンクール後に行った「自己評価シート」の結果からも、自尊感情を高める取組になったことが分かる。

エ　保護者・地域への普及・啓発

研究内容の保護者や地域への普及・啓発として、保護者向けの講演会を実施した。講演会では、スクールカウンセラーや外部講師から、思春期の子供たちに対する大人の関わりに関する講義を、「自尊感情や自己肯定感を高める研究」の視点を交えて行った。

保護者向け講演会

また、講演会の中で、「自尊感情や自己肯定感を高める研究」の内容や生徒の自尊感情を高めるために行っている取組と、その成果の発表を行った。

さらに、生徒の自尊感情や自己肯定感を高めるために、清瀬第三中学校では年間を通して保護者・地域へ普及・啓発を行ってきた。

毎月の学校便りや学年便りでは、授業や行事での生徒の頑張りを紹介したり、達成感についての生徒の感想文を載せたりするなど、保護者や地域に対して取組の成果を伝えた。

教員・保護者・地域の意見交換会
（道徳授業地区公開講座）

また、道徳授業地区公開講座では、主題を「自尊感情を高める」と設定し、授業公開後に教員・保護者・地域の方で協議や意見交換を行った。保護者からは、「授業の中で、お互いに認め合ったり、褒め合ったりする姿を見ることができてよかった。」「親も自分自身のよさに気付くのは難しい。子供を叱ってばかりなので、褒めるところを探していきたい。」「親も自分自身をなかなか肯定できないことがある。子供が自己肯定感をもてるように褒めていきたい。」といった感想があった。

その他、保護者向けの講演会や地域懇談会等において、自尊感情や自己肯定感を醸成する内容について話題にすることで、普及・啓発を図った。

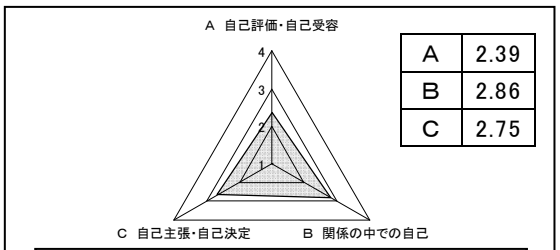
オ　成果と課題

＜成果＞

・　自尊感情や自己肯定感の醸成を視野に入れて、全教員が指導内容や指導方法を工夫し、学習指導案の指導上の留意事項に自尊感情を高めるための観点を具体的に記載するなど年間を通して意図的な指導を行うことで、教員の意識の高まりがみられた。また、普段の授業においても、自尊感情や自己肯定感の醸成に留意し、意識的に取り組むようになった。

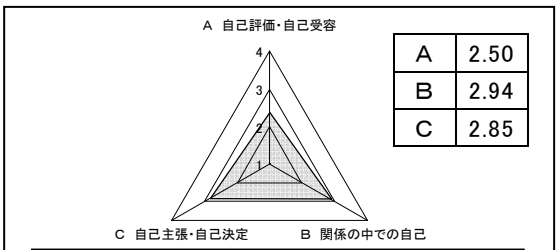
・　生徒が主体的に活動する活躍できる場の設定など指導の工夫を行った結果、相手の立場を考えた言葉遣いで生徒の意見交流が活発に行われるようになったり、以前よりも集中して授業に参加したり、深く思考したりするようになった。学習意欲が高まり、平成 24 年度東京都教育委員会「児童・生徒の学力向上を図るための調査」では、国語科の平均点が東京都の平均を上回り、学力向上が図れたと考える。

・　自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」を３回（５月、９月、11 月）実施した。全体的な傾向として、自尊感情や自己肯定感の高まりがみられ、個々には、自尊感情や自己肯定感が大きく高まった生徒もいた。学校が一体となって授業改善に取り組んだ成果であるといえる。



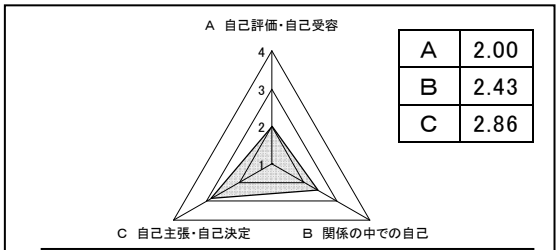
A	2.39
B	2.86
C	2.75

全校の自己評価シートの結果（5月）



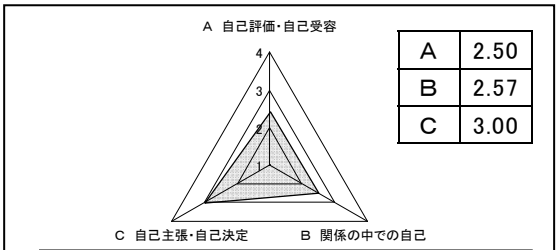
A	2.50
B	2.94
C	2.85

全校の自己評価シートの結果（11 月）



A	2.00
B	2.43
C	2.86

生徒 A（第１学年）の自己評価シートの結果（5月）



A	2.50
B	2.57
C	3.00

生徒 A（第１学年）の「自己評価シート」の結果（11 月）

＜課題＞

・　清瀬第三中学校の本研究の取組は、１年目で始まったばかりである。学校の重点目標「学力の向上」につなげるために、引き続き取組を継続していくことが課題である。

・　「他者評価シート」は１回実施したが、さらに実施回数を増やし、自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」の結果との関連を図るなど指導に生かす必要がある。また、継続した家庭や地域との連携も必要である。

(6) 都立第三商業高等学校

研究主題　「生徒の自尊感情や自己肯定感を高め、生徒の健全育成や学力向上を図る研究」

ア　ねらい

都立第三商業高等学校では、学習面やコミュニケーションの面で十分に力を発揮できず、自分に自信がもてない生徒が存在している。そこで、昨年度までの自尊感情に関する研究成果を踏まえ、授業や学校行事などの教育活動を通して、生徒の自尊感情や自己肯定感を高める指導を組織的に行うことにより、生徒の自尊感情や自己肯定感を高める取組を行うこととした。自尊感情や自己肯定感が高くなった生徒は、学校生活や家庭生活を安定して送り、学習への姿勢が前向きになり、学力向上へと結び付くものと考える。

イ　方法

(ｱ) 生徒の状況の把握と教員への啓発

- 「自尊感情や自己肯定感を高めるための教育」についての校内研修の実施
- 生徒の自尊感情の傾向を把握するための自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」を用いた調査（７月と 10 月）

(ｲ) 生徒の自尊感情を高めることに視点においた学校行事・授業

- 「Ｂ　関係の中での自己」を高めることにより、「Ａ　自己評価・自己受容」「Ｃ　自己主張・自己決定」も高めることを目指す学習指導
- 集団活動を通して、身近な友人等の支えがあって目標が実現したり、活動が充実したりすることに気付くこと（「Ａ　自己評価・自己受容」①成果の発揮、「Ｂ　関係の中での自己」③貢献意欲、④支えの気付き）、地域の方々との関わりの中で褒められたり、認められたりすることにより、自分のよさを認めてくれる人の存在に気付くこと（「Ｂ　関係の中での自己」②理解者の存在の気付き）ができる学校行事（宿泊防災訓練、文化祭等）の取組

教員の研修の様子

ウ　内容

(ｱ) 生徒の状況の把握と教員への啓発

年度初めに、１年間の研究の進め方や内容を教職員に周知するために、「自尊感情や自己肯定感を高める研究」の４年次までの成果及び子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料を基にして、東京都教職員研修センターの指導主事が講師となって、研修を行った。その後、７月に「自己評価シート」を実施し日常の指導に生かすとともに、10 月に再度実施し、生徒の変容を把握した。

実技訓練（AED 使用法の実習）

(ｲ) 生徒の自尊感情を高めることに視点においた学校行事・授業

Ａ　宿泊防災訓練

５月 25 日、26 日に宿泊防災訓練を実施した。消防署と連携した応急救命実技訓練、備蓄されているアルファ米を使った炊き出し、津波を想定した屋上への避難訓練などを行った。応急救命実技訓練では、ＡＥＤの使い方や応急担架の作り方などを学び、災害時には自ら進んで救命活動に貢献できるように意欲を高めた。また、アルファ米の炊き出しや津波を想定した屋上への避難訓練では、東日本大震災の際、学校へ避難した地域住民の方にも参加していただき、行動を共にすることによって、高校生が地域住民の支えになれることに気付かせた。宿泊防災訓練後の生徒の報告書に、「地域の信頼を裏切らないようにしたい」などの感想が書かれており、地域の人々との関わりによる生徒の「心の動き」が感じられた。（「Ｂ　関係の中での自己」④支えの気付き）

宿泊訓練での地域住民の方との対話

地域住民の方も参加した津波を想定した屋上への避難訓練

Ｂ　地域清掃活動（奉仕）

教科「奉仕」の体験活動の一環として、地域の清掃活動に取り組んだ。生徒は、４名程度の班に分かれて、学校周辺の決められたコースで清掃活動を行った。活動中に地域住民の方から「ありがとう」、「頑張ってくれて、感謝しているよ」、「きれいになって気持ちいいよ」などと直接、声を掛けてもらったことで、生徒たちは、自分の行動が地域の役に立っていることを実感し、「Ａ　自己評価・自己受容③努力の評価」「Ｂ　関係の中での自己②理解者の存在の気付き」の観点を高めることができた。

地域清掃活動

Ｃ　文化祭

文化祭の準備から終了まで、全教員が一人一人の生徒を見守り、頑張りを認め、活動を価値付けることで自尊感情を高める取組を行った。クラスや部活動ごとに目標を明確に設定し、目標を達成できるように全員の生徒に役割をもたせ、友達と協力して取り組み、当日は、自分たちの企画した催しに参加した人が楽しんでいる姿に触れることで、「Ａ　自己

文化祭での生徒の活動

評価・自己受容③成果の発揮」「Ｂ　関係の中での自己③貢献意欲」の観点を高めることができた。

Ｄ　販売実習

商業の授業の一環として、本校の近隣の商店街等で販売実習を行った。商品を買いに来た方からの「ありがとう」、「よく頑張っているね」などの言葉掛けが、働く自分に対する誇りを生み、「Ａ　自己評価・自己受容③努力の評価」「Ｃ　自己主張・自己決定①自己信念の遂行意欲」の観点を高めることができた。

販売実習

Ｅ　授業

自尊感情を高める指導の工夫を取り入れた授業を実践し、現代社会、マーケティング、国語総合において研究授業を実施した。

現代社会では、４人１グループで仮想の株式会社を作り、現代社会の仕組みと特色を理解する「企業シミュレーション」の授業を行った。会社の一員として役割を担い、友達と協力して商品企画をし、事業計画を策定していく活動を通し、仲間と協力して会社を運営し、それぞれが組織に参画できた満足感を味わうことで、「Ｂ　関係の中での自己③貢献意欲」を高めることができた。授業を受けた生徒からは、「商品を企画する作業は難しかったが、それ以上にやりがいがあると思った」などの感想があり、自尊感情の高まりを感じることができた。

現代社会(グループでの話合い)

マーケティングでは、課題解決能力を身に付けることを目標に、消費者の視点に立った商品を４～６人のグループで企画・開発し、プレゼンテーションを行った。教師は各グループでの生徒の発言をよく聞き、生徒の思いや考えに対して適切な助言をすることで、生徒は自分たちの意見が生かされていることを感じていた。また、自分の意見をグループの話合いで深められることで、「Ｂ　関係の中での自己①他者理解」の観点を高めることができた。

マーケティング（プレゼンテーション）

国語総合の「かぐや姫」の現代語訳の学習では、全員が参加できる学習形態の工夫として、一人一

国語総合（教師による助言）

人が担当する文章を決め、その後、グループ内で確認してから発表する活動を取り入れた。「友達に教える」という行為を通して、「Ａ　自己評価・自己受容④自分のよさ」の観点を高めることができた。さらに、グループで協力して取り組むことで、互いの考えの違いを認め合いながら、理解を深め、完成に向けて作業が進んでいることを実感できた。また、教師は机間指導を通して、生徒の学習の進度に応じて声掛けをし、生徒が現代語訳したものを認めることに重点を置いた指導をした。

以上のように、第三商業高等学校では、教科等の授業において、話合い活動や協力して課題に取り組む活動を取り入れることなど指導方法を工夫することより、生徒の自尊感情は、主に「Ｂ　関係の中での自己」を中心に高まり、この高まりが学習への取組の意欲向上につながり、学力向上へとつながるものと考えている。

エ　保護者・地域への普及・啓発

保護者へは、各学年の保護者会やＰＴＡ活動の中で、本校での取組への理解を図り、地域へは、学校運営連絡協議会や販売実習などで自尊感情を高めるように日常的な生徒への声掛け（「ありがとう」という感謝の言葉、「頑張っているね」と認める言葉など）を依頼した。

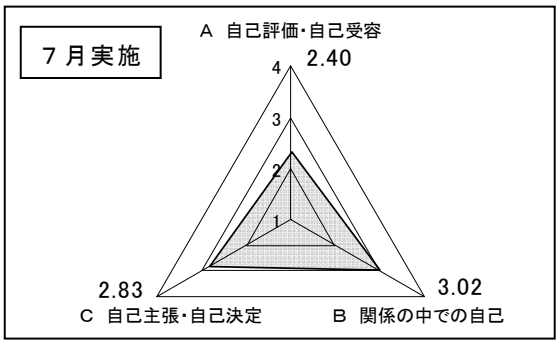
オ　成果と課題

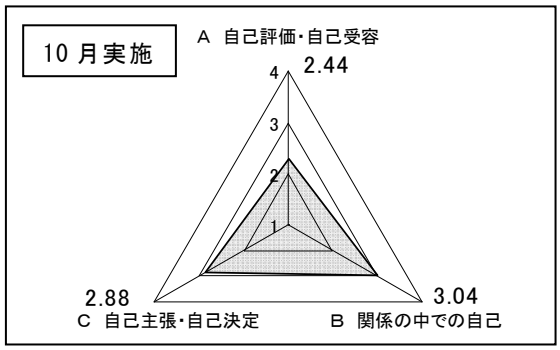
＜成果＞

・　３観点のうち、「Ｂ　関係の中での自己」の数値が最も高くなっているが、７月から 10 月までの数値は「Ａ　自己評価・自己受容」、「Ｃ　自己主張・自己決定」の観点も伸びており、「Ｂ　関係の中での自己」を高めることにより、他の２観点も高めることができた。

・　就業体験を通じて多くの生徒が、勤労の意義を理解し、広い視野と倫理性をもって様々な課題解決ができるようになり、生徒の健全育成につながった。

・　体験学習や課題探究型の学習を積極的に取り入れたことによって高まった自尊感情や自己肯定感が、「自ら学び考える」という主体的な学習につながった。その結果、簿記・情報処理・ワープロなどの検定試験にも積極的に取り組み、どの検定試験も全体的に合格率が向上した。さらに、授業規律も向上し、「自分の中にはさまざまな可能性がある」という認識が高まったことによって、積極的に授業に参加するようになり、昨年度と比較して、多くの生徒の評定の平均が向上した。





自尊感情の変容（全校平均）

＜課題＞

・　保護者の協力を得ながら、他者評価シートを有効に活用する方法を検討すること。

・　地域に対しても、生徒の自尊感情を高める方策を啓発して協力体制を築くこと。

(7) 都立墨東特別支援学校

研究主題　「自尊感情や自己肯定感を高めるキャリア教育の推進」

ア　ねらい

都立墨東特別支援学校は平成 23 年度に引き続き、東京都肢体不自由特別支援学校キャリア教育推進委員会の担当校に指定され、肢体不自由特別支援学校におけるキャリア教育の充実について、校内プロジェクトを立ち上げて検討してきた。

キャリア教育を通して、児童・生徒一人一人のキャリア発達を促進するとともに、卒業後は仕事だけではなく、家庭生活、余暇（趣味）などでも様々な役割を果たせるようにしていきたいと考えている。「今だからしなければならないことと、今だからできること」を子供と一緒に考えながら、未知のことに挑戦する勇気と興味の幅を広げていくことで、自尊感情や自己肯定感を高めるとともに、全ての児童・生徒の自立や社会参加を一層推進していきたいと考え、本研究に取り組んできた。

イ　方法

児童・生徒の発達段階や障害特性に応じて自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」と「他者評価シート」を計画的、組織的に活用するとともに、実態把握に基づく学習活動の充実を図った。

- 自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」の活用
- 自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」と「他者評価シート」の比較に基づく実態把握
- 交流及び共同学習など、体験的な学習の計画的な実施

ウ　内容

(ｱ) 自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」の活用

中学部、高等部の準ずる教育課程（以下「Ａ課程」という）在籍の生徒を中心に自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」を活用し、 自尊感情の傾向を把握した。

高等部Ａ課程 「情報」

Ａ課程に在籍する児童・生徒は、日常生活において教員や友達との主体的な関わりや会話が可能である。そのため、日常生活での行動観察をすることで、教職員や保護者が主観的に自尊感情の傾向を把握していることが多かった。しかし、自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」の活用を進めたことで、児童・生徒の自尊感情の捉え方が客観的になるとともに、レーダーチャートで示された資料を基に客観的に実態を共有し、課題や支援方法について話し合い、ケース会議を活性化させ、指導の改善に生かすことができた。

(ｲ) 自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」と「他者評価シート」の比較に基づく実態把握

Ａ課程在籍の児童・生徒には自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」とともに、「他者評価シート」も合わせて実施した。「他者評価シート」の実施に当たっては、学級担

任だけではなく教科担任や学校介護職員も評価を行った。二つのシートを活用し結果を比較することで、自己評価と他者評価の違いが明らかになるケースも多かった。自己と他者の評価を比較検討することで、児童・生徒の実態把握を深めるとともに、教職員間で児童・生徒の共通理解を深めることができた。

また、知的代替の教育課程（以下、「Ｂ課程」と表記。）在籍の児童・生徒には「他者評価シート」による実態把握を行った。「他者評価シート」の実施に当たっては、Ａ課程の児童・生徒と同様に、学級担任だけでなく教科担任や学校介護職員も評価を行い、複数の立場から児童・生徒の自尊感情の傾向を把握した。なお、自立活動を主とする教育課程（以下、「Ｃ課程」と表記。）に在籍する児童・生徒に対しては、実態からシートによる評価を行うことが難しかったため、本研究の観点を取り入れながら主体的な活動を引き出すよう、キャリア教育の視点に基づいた指導の充実を図った。

Ａ課程、Ｂ課程それぞれにおいて立場の異なる教職員が評価を行うことで、児童・生徒の様々な側面が明らかになった。明らかとなった視点に基づき、日常生活における指導方法の改善や授業内容の工夫、指導方法の改善を図ることができた。

(ｳ) 交流及び共同学習など、体験的な学習の計画的な実施

全校で体験的な学習を計画的に行い、自尊感情や自己肯定感を育てる学習を推進した。特に全学部を通じて、交流校との連携の基に充実した交流及び共同学習を行った。

小学部　交流及び共同学習

小学部では墨東特別支援学校が継続的に行っている音楽や動作模倣を計画的に取り入れるドラマケーションの手法を用いることで、墨東特別支援学校の児童が交流校の児童をリードする形で交流を進めることができた。墨東特別支援学校の児童が主体的に活動に取り組む姿を見て、交流校の児童も活動の内容を理解して活動を楽しむことができた。レクリエーションの中で、墨東特別支援学校の児童から「自分と同じものを好きな人がたくさんいてくれて嬉しかった」との発言があった。特別支援学校の児童がリードできる活動は多くないが、この交流では墨東特別支援学校の児童が主体的に活動するとともに、交流校の児童とも活動を共有することで自尊感情を育むことができた活動であった。

高等部　交流及び共同学習

中学部では学部全体で交流校とのレクリエーション活動を行うとともに、Ａ課程在籍の生徒を中心とした少人数での交流も行われた。少人数で趣味や特技、将来の夢について話し合うことで両校生徒の相互理解が深まった様子であった。両校の生徒が「自分たちと同じだね」と言葉を交わす姿から、友達の考えや気持ちを受け入れ、自分を見つめ直す貴重な学習になったと考える。生徒の自尊感情や自己肯定感を高めるためにも効果的な活動であった。

高等部ではＡ課程在籍の生徒会役員を中心として都立高等学校との交流を行った。少人数

での交流を行うことで活発に話し合い、互いの趣味を共有し合うことができた。交流の場では校内の友達や教員との関わりだけでは見ることのできない笑顔が見られ、墨東特別支援学校の生徒の自尊感情や自己肯定感の高まりが感じられた。また、その場だけでなく継続的な交流を期待する言葉も双方の生徒から聞かれ有意義な活動であった。墨東祭も児童・生徒の自己肯定感を高めるために非常に効果的な学習であった。

墨東祭に向けては、児童・生徒の実態に応じて役割や責任を明確にして学習を行った。Ａ課程の児童・生徒にとっては、与えられた役割を演じきることで得られる達成感から自尊感情の高まりが感じられた。またＢ課程の児童・生徒においては、友達や教員との関わり、音楽や衣装などの学習環境の工夫を通して活動を楽しむ姿が見られ、自己肯定感の高まりが感じられた。Ｃ課程の児童・生徒においては、実態に応じて工夫された教師の支援を通して主体的な活動が引き出されるとともに、安心して活動に取り組む姿が見られ、自尊感情の高まりが感じられた。

中学部　墨東祭舞台発表

エ　保護者・地域への普及・啓発

(ｱ) 学校便りの活用

学校便りを活用し、保護者に本研究の概要を説明した。特別支援学校として本研究を深めるために、保護者の「他者評価シート」の実施に向けた協力依頼を２学期初めに行った。

中学部Ａ課程 「道徳」

(ｲ) 道徳授業地区公開講座の実施

10 月に小学部・中学部で道徳授業地区公開講座を行った。墨東特別支援学校では保護者を中心とした授業参観を行うとともに、授業後に授業者と保護者が授業に関して話し合う授業ディスカッションを行った。小学部道徳授業地区公開講座では、「日頃、お世話になっている人にありがとうと伝えよう」という内容で授業を行った。児童にとっては自分と他者との関わりを見つめ直す機会となり、保護者にとっても児童の成長を実感し喜びを味わうことができた授業であった。

道徳授業地区公開講座授業ディスカッション

中学部道徳授業地区公開講座では、自分のよさを見付け友達と共有し合うことを通して自尊感情を高める学習を行った。保護者も笑顔で授業を参観し、生徒の成長を感じていた様子であった。小・中学部共に授業ディスカッションの際に本研究に関する説明を東京都教職員研修センター指導主事から行い、保護者も本研究に関しての興味を深めることができた。

(ｳ) 保護者会での啓発

２学期末の全校保護者会において、東京都教職員研修センター指導主事から「他者評価シート」の活用を中心とした説明を保護者に対して行った。

指導資料から抜粋した資料とともに、「他者評価シート」、自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」を実際に確認し、理解を深めた。

全校保護者会

教職員に対する研修

オ　成果と課題

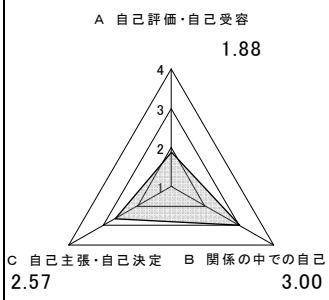
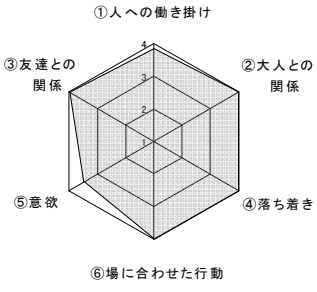
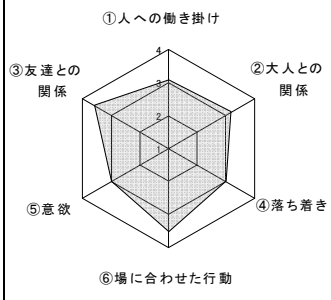
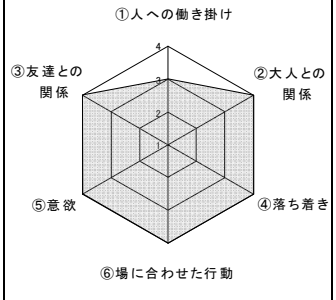
＜成果＞

・　教職員が一体となった取組

年度当初に東京都教職員研修センター指導主事が行った本研究に関する研修には、教員、学校介護職員等 100 名を超える教職員が参加した。職種を超えて、本研究に学校が一体となって取り組むため、研究に関しての共通理解を深めることができた。

・　組織的な「他者評価シート」の活用

「他者評価シート」の実施については、下の活用事例のとおり、学級担任だけでなく、教科担任や学校介護職員が連携して評価を行った。複数の教職員が連携して評価を行うことで、児童・生徒の捉え方が多面的になった。生徒の自己評価との違いや教職員の立場や関わり方の違いから生徒の実態や課題を設定し、声掛けや教材の工夫などの支援方法の改善に生かすことができた。そのことにより、教職員が自尊感情や自己肯定感を意識した指導を心がけるようになった。

自己評価シート	他者評価シート		
 中学部Ａ課程生徒	 Ａ教諭	 Ｂ教諭	 学校介護職員

生徒Ａに対する「自己評価シート」「他者評価シート」活用事例

＜課題＞

・　「他者評価シート」の実施に当たる保護者との連携

「他者評価シート」の活用に当たっては、Ａ課程、Ｂ課程の生徒を中心に教員、学校介護職員の実施となった。今後は、保護者会や授業参観、学校便りをはじめとする各種の便りなどを活用し、全校保護者に一層の呼び掛けを行い、保護者と教職員による他者評価シートの定期的な活用など家庭とより連携した取組を学校全体で推進していく。

(8) 関係教育委員会

ア　千代田区教育委員会

千代田区教育委員会では、人権教育推進委員会の研究テーマを「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための指導の在り方」として取り組んだ。

平成24年６月25日（月）に千代田区役所で行われた第１回千代田区人権教育研修会において、東京都教職員研修センター指導主事が講師となり、同センターの「自尊感情や自己肯定感に関する研究」の基本的な内容、指導事例等について説明した。

平成24年12月11日（火）には、千代田区立九段小学校において、人権教育推進委員会が取り組んできた研究の提案授業が行われた。事前に、自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」を全児童に実施し、学級及び個人の自尊感情の傾向を把握した上で指導計画を立て、授業を実践した。内容は、１年生道徳の授業で、道徳授業のねらいの他に、自尊感情や自己肯定感を高めるための視点として、自尊感情の３観点「Ａ　自己受容・自己評価③努力の成果」に焦点を当てた授業であった。学習指導案に、自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点を位置付け、指導者が意図的・計画的に授業を行った。

授業後の協議会では、幼稚園や小学校低学年から自尊感情を高めていくことの重要性や具体的な指導方法について、人権教育推進委員以外の教員や異校種の教員から活発な意見が出された。協議会後に東京都教職員研修センター指導主事が各教科等の指導において、「学習内容」及び「指導方法」を工夫することで自尊感情や自己肯定感を高めることにつながることについて演習を通して説明した。

九段小学校での提案授業

千代田区教育委員会では、今後、自尊感情や自己肯定感を高める指導事例等を啓発指導資料リーフレットにまとめ、区内全教職員に配布する予定である。

イ　目黒区教育委員会

目黒区教育委員会では、「めぐろ学校教育プラン」に、人権教育や道徳教育を位置付け、子供一人一人を大切にする教育を推進している。本年度は研究推進校である目黒区立五本木小学校の自尊感情や自己肯定感に関わる研究内容や取組状況について、副校長会や教務主任会において各学校に周知した。また、次年度の「きょういく広報」において、目黒区立五本木小学校の取組を区民に紹介していく予定である。

ウ　町田市教育委員会

町田市教育委員会では、平成 24 年 11 月 23 日（金）に教育関係者のほかに多数の都民も集う中、町田市民フォーラムホールにてテーマ「子供の自尊感情や自己肯定感の向上を目指して」と題して講演会を行った。

町田市教育講演会

町田市立町田第五小学校より授業の様子、自尊感情や自己肯定感を高める工夫等、１年間の研究成果の報告があった。特に、地域へどのように学校での取組を発信しているか等の啓発についての発表があった。次に「子供の自尊感情を高める学校・家庭・地域の取組」と題して慶應義塾大学教

職課程センター伊藤美奈子教授から、自尊感情の発達段階における変化、自尊感情の育成に必要な視点等についての講演があった。

講演会

自尊感情は、３観点の高さも大切だが、３観点のバランスが大切である。また、自尊感情は年齢により変化し、人間関係の中で育つものであり、人に尊重される経験が人を尊重する態度を養うものである。しかし、子供の問題は多様化・複雑化しているので、保護者だけが悩まず、教育的支援、心理的支援、医療的支援、福祉的支援、司法矯正的支援を学校、家庭、専門機関、そして地域社会が手を組んで行う必要性がある。また、自尊感情を高めるためには、愛される経験、褒められる経験、認められる経験、感謝される経験を学校・家庭・地域において積むことが重要である。

エ　小平市教育委員会

小平市教育委員会では、平成 24 年度から市立学校全校で実施している「こだいらの小・中連携教育」として、学力の向上、健全育成の推進、体力の向上、キャリア教育の推進、特別支援教育の推進に取り組んでいる。キャリア教育の推進の取組として、「自己肯定感を育む」と「将来設計能力を高める」の二つの視点について小・中９年間を通してのどのような視点が必要かを提示し、各学校の現状に応じ、実践を行っている。また、今年度の小平市教育研究発表会において、小平市立花小金井南中学校から「自尊感情・自己肯定感を高めるための教育」についての実践を発表してもらい、市内小・中学校全教員で研究成果を共有した。

オ　清瀬市教育委員会

清瀬市教育委員会では、教育目標の第一に「互いの人格を尊重し、自他の生命を大切にするとともに、思いやりと規範意識をもって行動できる人間を育成する」ことを掲げ、教育活動全体を通じて人権教育の推進、望ましい人間関係づくりのための指導の充実、「伝え合う力」の育成、生命尊重に関わる指導等を通して、命を大切にする心の教育を推進している。

平成 25 年１月 31 日（木）に清瀬市生涯学習センターアミューホールにおいて、「命の教育フォーラム」が開催された。自尊感情を高め、自他の生命を尊重することは、命の教育の根幹をなすものであるという考え方の下、市内各学校教職員、地域・保護者等、多数の参加者の中、本研究の推進校である清瀬市立清瀬第三中学校をはじめ、清瀬市立清明小学校や清瀬市教育相談センターから、「命の教育」の具体的な取組が報告された。清瀬第三中学校の報告は、「『自尊感情・自己肯定感を高める教育』の推進について」と題して、今年度の研究の普及・啓発活動についてのまとめとなるものであった。

命の教育フォーラム

また今年度は、市内各学校での具体的な実践の報告に加え、「いじめのない学校を目指して」と題し、市内の小・中学校長、教職員、教育相談室主任相談員、スクールソーシャルワーカーがパネルディスカッションを実施し、会場の参加者と共にこれからの学校の取り組むべき方向性について考える機会となった。

２　教員研修等の取組

(1) 夏季集中講座「自尊感情と自己肯定感を高める教育」

日　時　平成24年８月６日（月）13:30～17:00

会　場　東京都立多摩社会教育会館ホール

参加者　都内学校教職員、保護者、都民、大学生

ア　シンポジウム「国際的な視点から日本の子供たちの自尊感情や自己肯定感を考える」

シンポジスト：

・胡　霞（財団法人日本青少年研究所研究員【中華人民共和国出身】）

・榊原　奈美（国分寺市立第五小学校主幹教諭）

・チャクル　ムラット（筑波大学大学院博士後期課程【トルコ共和国出身】）

・マリア　クラウディア　フルゲン（東京学芸大学大学院修士課程【アルゼンチン共和国出身】）

・新見　拓馬（東京学芸大学【東京教師養成塾生】）

司会：海老江　直子（東京都教職員研修センター研修部教育開発課統括指導主事）

シンポジウムでは、財団法人日本青少年研究所の研究員、教員、留学生、日本の大学生の５人をシンポジストに招き、それぞれの立場から自尊感情や自己肯定感についての話を伺いながら、シンポジストと会場が一体となり、国際的な視点から日本の子供たちの自尊感情や自己肯定感について考えることができた。シンポジストの主な発言内容を紹介する。

胡　霞さん（財団法人日本青少年研究所研究員【中華人民共和国出身】）

北京の学校は様々な機会を設けて、子供たちに自分はできるという体験をさせている。これは自尊感情を育てるポイントだと思う。日本の高校生の自己肯定感は、ポジティブな項目で他国より低くなる特徴がある。アメリカや中国では、子供の頃から自分のよい点をはっきり表明することが評価される。日本では、自分のことに控えめで謙虚であることが美徳とされる。しかし、日本の高校生の自尊感情が乏しく、ネガティブな自画像を抱えているのは、国民性の違いだけではないと思う。教育理念の違いや、子供たちの意欲の高さにも関わっていると考える。

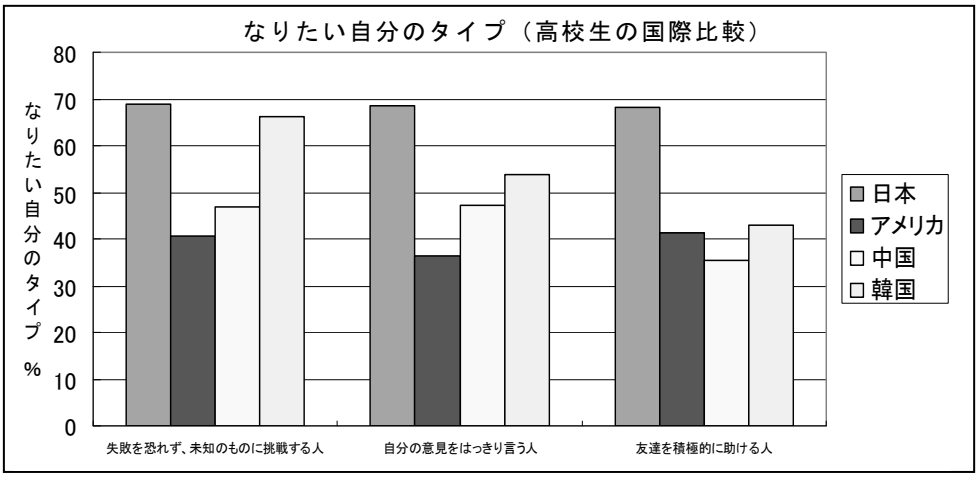
アメリカ社会ではユニークであることに価値があり、オンリーワンになることが強調される。中国の学校教育は小学校から大学まで優秀模範生を選出する制度があり、学力、体力、道徳、共に優秀な模範生等、目指すべきよい点をはっきり表明しナンバーワンを強調している。これに対して日本は、みんな仲良くという集団意識が強く、個人の能力より友達との協調性を重視している。自尊感情の３つの観点からいうと、「Ｂ　関係の中での自己」を重視し、アメリカと中国は「Ａ　自己評価・自己主張」を重視していることが分かる。

日本の生徒は、自分は優秀だと明確な根拠をもつ機会

が少ないのではないかと思う。一方、先生や親に優秀であると認められたり、思われたりしている肯定率も日本は他の３カ国より下回っている。日本の子供は、普段親や先生にあまり褒められたり認められたりしていないのでないかと感じる。アメリカの先生や親は子供を叱るより、何かができると褒めることを強調する。

中国の親は、教育熱心で、我が子を優秀な人材に育てたいという気持ちがとても強い。教育熱心の背後に、「やればできる」という信念を強くもっている。また、面子を重視する中国では、自分はだめだと認めることはとても少ない。

日本の高校生は自己評価が低い分、発達や成長、自己改革の目標を高くもち、自分を高めたいという希望を強くもっている点は評価すべきである。学校で子供たちの意欲を引き出し、自分の個性を確かめるチャンスを与え、自分のできること、自分のよさ、自分の可能性を認識させることによって自己肯定感を高めることができると期待している。



「高校生の生活意識と留学に関する調査報告書（日本青少年研究所 平成 23 年度）」より作成

チャクル　ムラットさん（筑波大学大学院博士後期課程【トルコ共和国出身】）

学校と地域が連携して、学校支援ボランティアなどを学校に入れて子供の学習をどのように高めるか、ということについて研究している。自尊感情を考えると、外部の人が子供に関わることで、自尊感情に影響があるのではないかと考えるようになった。自尊感情は個人の内面で固定しているわけではなくて、家庭・学校・地域の人々との関係の中でも影響を受けていると考える。

トルコの子供たちの様子を考えると、「Ａ　自己評価・自己受容」の観点は高いが、「Ｂ　関係の中での自己」の観点は低いのではないかと感じる。アメリカや中国と似ているかもしれないが、自己主張的な部分があって相手との関係はあまり考えないように感じる。日本の子供たちは非常に「大人」に見える。私が日本の学校で講義をしたときに、私の言いたいことを考え、私が期待する反応をし、してほしくない反応をしないという状況があった。

子供の自尊感情を高めるためには教師だけでは限界があるかもしれない。教師の仕事も増えている中で、教師一人が多数の子供の自尊感情を高めていくには、大変な苦労があるように感じる。学校全体で子供の自尊感情を高めるための雰囲気をつくり、地域とどのように連携するかということが大切であると思う。

マリア　クラウディア　フルゲンさん（東京学芸大学大学院修士課程【アルゼンチン共和国出身】）

アルゼンチンでも人と異なっている方がよいという考え方で、それが教育にも反映されている。私の知る限り、特別な私立学校以外では授業が半日のため、空いている半日はサッカークラブに所属したり、塾に行ったりして自分達で生活を組み立てる。子供はいろいろな社会に所属する機会が与えられている。毎日通う学校であれば特別に自己表現をしなくても理解されるが、他の社会では自分で発言し、自分の存在を主張しなければいけないため、コミュニケーションや表現する環境はとても多い。アルゼンチンでは、自分の子供でなくても自分の子供のようにかわいがる大人が多い。家族環境が恵まれていなくても深い絆ができる可能性も高く、絆があることで自尊感情もとても高いと思う。アメリカでは叱ることは少ないということだが、アルゼンチンではよく叱ると思う。しかし、全員の前ではなく個別に叱るように配慮している。アルゼンチンでは、自尊感情に関して友達との関わりや褒められることとの関連を考えたことがなかったが、日常生活で普通に褒められることは自尊感情の高い基盤につながっていると思う。

新見　拓馬さん（東京学芸大学【東京教師養成塾生】）

私自身の自尊感情は、周りの友人に比べて高いのではないかと感じる。なぜ自尊感情を高めることができるか、三つの要因を考えた。

第一にやりたいことができていることである。勉強や部活動、アルバイトなど、周囲の助けを借りながらやりたいことをすることで、自分のことを好きになれていると感じている。第二に、部活動を続けてきたことである。その中で成功したり、仲間に認められたりすることを通して自己肯定感が高まり、自尊感情をもつことができていると思う。第三に小学校の先生の影響である。その先生はいつも明るく、クラスの雰囲気を盛り上げていた。その先生に教えてもらうことで、自分の考え方や性格も明るくなったと考えている。また、その先生は私達のよいところを見付け褒めてくれた。そのことで、自分のよさに気付かせてもらい、自信をもつことができるようになった。私が教師を目指す理由も、その先生の影響が大きい。成長するにつれて、学校の先生は楽しいだけの仕事ではないことは感じている。しかし、その苦しさや大変さを知っても、子供たちの笑顔や成長に関わることができる、それを近くで見ることができる教師という仕事に魅力を感じている。

榊原　奈美さん（国分寺市立第五小学校主幹教諭）

国際的な視点から日本の子供たちが自己に対して否定的であり、現状満足志向だということを聞き驚いている。

私は小学校に勤務しているが、そこまで低いとは感じていない。しかし、やはり自分自身を認めることは確かに少ないと感じている。自分を高めたいという意識が高いという発言にも驚いている。私たちは子供たちの意識をしっか

りつかんで指導に当たらなければならないと痛感した。トルコとアルゼンチンのように日常的にコミュニケーションをとれる環境づくりは、ぜひ学校や地域でも取り組みたいと感じた。また、他と異なっている方がよいとされること、子供はいろいろな社会に所属する機会があること、そして自分自身を見せるために自分で自分を表現しなくてはならないということを聞き、日本の子供たちの環境の中ではそのような機会が少ないと感じた。

本校の研究でも、他者との関わりをしっかりつくることを重点的に考えた。研究の成果として、できるという体験を積み重ねていくことは有効である。それも、周りの助けを借りながら、周りの人に褒められ、よいところを見付けてもらいながら、仲間と共に、という視点が日本の子供たちにとってのよいかたちだと考える。本校の子供たちも、「Ｂ　関係の中での自己」が「Ａ　自己評価・自己受容」と「Ｃ　自己主張・自己決定」に比べて高い結果にあった。しかし、ＡとＣだけを伸ばせばよいということでなく、Ｂを伸ばすことによってＡとＣが上がる、つまり「Ａ　自己評価・自己受容」と「Ｃ　自己主張・自己決定」が伸びることも成果として分かっている。子供たちには関係の中で安心した環境、良い環境の中で学校生活を送っていかれるようにしたいと感じている。

イ　講演「自尊感情や自己肯定感に関する研究を振り返って」

講師：慶應義塾大学教職課程センター教授・博士（教育学）　伊藤　美奈子さん

自尊感情は、心理学の研究の重要なテーマの一つとして、これまでにも長い歴史がある。東京都との共同研究では、自分のできることやできないこと、全ての要素を包括した意味でできる部分だけではなくて、できない自分も含めて自分というものを見つめる。自分さえよければそれでよいということではなく、人との関係を通してかけがえのない存在、価値ある存在として捉える気持ちとして、従来の自尊感情、自己肯定感から少し広げた概念と捉え、東京都の定義となった。そして、学校や社会で子供たちの生きる力の基盤となるような、自尊感情を捉えたいと考え研究を始めた。

自尊感情は、様々なプラスの要素と必ず関連があると感じている。例えば、学校適応に関する要素、人間関係が良好で友達が多い、勉強に対する自信がある、教師との関係、行事や部活動などの参加状況、進路意識などの得点とは必ず正の相関があり、自尊感情が高い子供ほど学校での適応が良好だということが見えてきた。自尊感情が高い子供は、親から理解されているという意識も強い。自尊感情が低いほど、今挙げた抑うつ感や不登校傾向が強いことが明らかになっている。私も臨床現場に関わる中で実感していることとして、いじめを受けている子供、あるいは虐待を受け続けた子供の自尊感情は低いと感じている。そのような問題と自尊感情とは必ず負の関係がある。また、その子供が生きていく中でどういう経験を積むか、どういう人間関係に恵まれるかによって、自尊感情の傾向は、変化する可能性がある。つまり学校教育や家庭教育など、様々な社会での経験によって自尊感情を伸ばす子供もいれば、逆に自尊感情が損なわれる子供もいるということを押さえないといけない。

自尊感情が下がる思春期特有の特徴の背景に、他者のまなざしへのとらわれが存在する。自分に自信がないときは被害妄想的に想像してしまい、マイナスに考えやすい。失敗や挫折

など、苦しいときの方が自分に気持ちが向くようになる。苦しいときに自分と向き合うため、余計に自分を厳しく見つめ、ますます自分が落ち込む方向に考えてしまいがちになる。中学生を中心とした思春期の子供は、割り切ることができず人のことを気にするあまり自分をますます落ち込ませる傾向があり、自己否定や自己嫌悪など自己評価を下げる状態に陥ることが多いと考える。そういう意味でもグラフが右下がりになっていくというデータは、ある意味で自分と向き合うことができる、あるいは自分を他者のごとく見られるという成長の結果と解釈することもできる。

その後、年齢が進むにしたがって自尊感情は回復していくことが分かっている。自分は自分、人は人と考えることができるようになり、社会経験による自信、あるいは年齢から来る知恵なのか、様々な要素を含んでいると思われるが、最終的には50代で小学校５年生くらいの得点と並ぶことが分かった。

生まれてすぐの乳幼児期は、親や養育者からたっぷりと無条件の愛情をもらう。これが自分を信頼し、人を信頼する力になる。小学校に入ると勉強が始まる。学校では、褒めることを非常に重視して上手に言葉掛けを工夫していると思う。やはり「頑張ったね」、「すごいね」と褒められることが、子供たちの自信、さらには自尊感情につながる。思春期、青年期である中学生や高校生になると、褒められることに対して気恥ずかしさが出てくる。褒めてもらうだけでなく、人間としての自分の価値、あるいは自分の存在を分かってほしい、認めてほしいという感覚が強くなると考えられる。

大切なことは、発達段階に応じて、階段を登っていくように成長していくことである。生まれてすぐの乳児期に虐待を受け、親の愛情を受け取れなかった子供は、様々な問題をその後に示すことがある。例えば、思春期に非行に走ったり自傷行為が止まらなかったり、自分を愛することができない、自分を認めることができないという様子に臨床場面で会うことがある。初めて自分を大事にしてくれる先生や仲間と出会えたということで、自分も他人も信じることができなかった子供が、それまでの成長を挽回することができることを考えると、自尊感情は、子供個人の努力で向上させるものではなく人間関係の中で育っていくものであることを痛感する。

親の自尊感情と子供の自尊感情の関係について、アメリカの研究では、母親の自尊感情が高いほど子供の自尊感情も高いという結果があった。小学校と保育園、幼稚園に協力していただき親子のマッチングデータを取ったところ、アメリカほど強い関係ではなかったが、親の自尊感情得点と子供の自尊感情得点は無関係ではないことが分かった。子供たちの自尊感情を高めるためには、親も教師も健全な自尊感情をもつことが大事であると感じている。

欧米とは違い日本人特有の謙譲を美徳とする文化の影響のため、日本人の自尊感情は低いという指摘はあった。私が子供の頃には、あまり我を出すなという考えが割と強くみられたが、現在では自分を上手に表現し、個性を尊重する教育に力が尽くされていると思う。教育内容も、この30年くらいの間でかなり欧米化が進んだように感じる。個人主義に大きく振り子が振れているが、世界の影響を受けながらも土壌にある日本の文化を大切にしつつ、新しい在り方を今の子供たちが創っていってくれると感じている。

(2) 専門性向上研修「心の教育」

平成 24 年８月 16 日（木）午後、東京都教職員研修センター視聴覚ホールにおいて、約 500 名の参加者に対して、「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための指導の工夫」と題した研修を行った。

研修の様子

主な内容として、同センターの「自尊感情と自己肯定感に関する研究」についての説明と参加者によるグループディスカッションを行った。研究の説明の他に、職場体験についての役割演技、自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」のデータの活用の仕方の実演などがあった。参加者は、非常に熱心に聴き、グループでの協議では活発な発言が見られた。参加者からは、以下のような感想や意見が寄せられた。

- 自己肯定感という言葉の捉え方、他者との関わりの大切さを知りました。
- 先生方と情報交換することで、異校種の実態、指導法を知ることができました。
- 自尊感情を育てるため、地域との連携が有効であることが分かり、新鮮な驚きを覚えました。これまで学校で取り組んできた実践を捉え直し、ねらいを明確にもてば、子供の自尊感情を育むことができると思い、行事等のねらいを考えていこうと思いました。

(3) 都教委訪問

自尊感情や自己肯定感に関する校内研修会等に指導主事が訪問（都教委訪問）し、研究内容の説明及び「指導資料【基礎編】【発展編】」の普及・啓発を行った。都教委訪問【モデルプラン８】「自尊感情や自己肯定感を高める教育の推進のために」として、研修のねらい・内容・方法を東京都教職員研修センターホームページに掲載した。教育委員会、幼稚園、学校を訪問し、研修会等を実施した（全 11 回）。

研修会の内容は、平成 20 年度からの「自尊感情や自己肯定感に関する研究」の成果を踏まえ、自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」及び「他者評価シート」を活用して自尊感情の傾向を把握する方法や、自尊感情や自己肯定感を高める学習内容や指導方法の工夫等について説明した。

都教委訪問の様子

また、各学校・園の子供たちの自尊感情の実態、高まった様子等について、演習及び協議した。特に、具体的な指導方法や指導内容について協議することにより、訪問先の学校の教員は、校内での実践や研究の内容と関連付けて、自尊感情や自己肯定感を捉えていた。

さらに、自尊感情測定尺度（東京都版）を実際に実施することにより、本研究の活用方法について理解を深めた。

受講者からは、「研修会実施前は、自尊感情や自己肯定感について、難しい印象があったが、研修会を通して、日常の教育活動に本研究の内容を少し加えるだけで、授業が変わり、子供たちの意識が変わることを理解した。」との感想があった。

(4) 他道府県への発信

ア　広島県大竹市立玖波小・中学校

玖波中学校の研究発表会

平成 24 年度広島県「心の元気を育てる地域支援事業」の指定を受けた大竹市立玖波小・中学校は、体験活動を通して家庭や地域との結び付きを深め、授業でも子供の自尊感情を高め、生徒指導上の諸問題の未然防止を図る取組を行っている。そこで、自尊感情・自己肯定感を高める取組等について指導助言、講演等を行った。

玖波中学校では、県指定のアンケートを行ったところ、生徒の実態として、自尊感情や社会参加の意欲が低いことと、学年が上がるにしたがって、低くなる結果が見られた。そのため、自尊感情に関する生徒の現状を把握し、意図的・計画的・組織的に高めるために、「自尊感情測定尺度（東京都版）」を活用し、個々の児童・生徒について自尊感情の現状を捉えている。活用に当たっては、研究担当者が東京都教職員研修センターを訪れ、研究の取組と推進校・園連絡会を見学したり、教頭が夏季集中講座に参加したりして研究成果の共有を図った。

また、当センターからは、玖波小・中学校公開研究会の講師として教育開発課長が招聘され、本研究の取組と、日本の子供たちの自尊感情の特徴や他者との関わりの中から自尊感情を育むことなどの講演を行った。

教育開発課長の講演

本研究により、教職員の自尊感情や自己肯定感に対する理解が深まり、授業改善や学級・学年経営についての改善意識の向上につながったという成果を得た。

イ　その他の本研究成果の発信

研究の５年目を迎えた今年度は、都内公立学校以外に他道府県への研究成果の発信の機会が多くあった。５月の「平成 24 年度全国教育研究所連盟総会・研究発表大会（沖縄大会）」では、「自尊感情や自己肯定感に関する研究」についての発表後に問合せ等もあり、多くの反響があった。６月には、宮崎県立日向高等学校の研究担当者が来所し、研究の内容と研究推進校の取組の視察を行った。また、青森県教育委員会からの視察もあり、他道府県における自尊感情の研究の推進に資することができたと考える。

他道府県からの視察

また、「自尊感情測定尺度（東京都版）」と併せて、本研究資料「自信　やる気　確かな自我を育てるために」に関する問合せもある。栃木県総合教育センター、岐阜県教育委員会、奈良県教育委員会、兵庫県教育委員会などの県教育委員会をはじめ、宮城県の高等学校や神奈川県相模原市の中学校といった他県の公立学校に研究成果の普及を行うことができた。今後は、他道府県においても自尊感情の研究が取り組まれ、本研究が先行研究として、大きな役割を果たすことが期待できる。

第４　研究の成果と今後の方向性

１　今年度の成果

今年度は、「自尊感情や自己肯定感を高める教育」推進校・園を６校・１園に拡大して本研究の普及・啓発に取り組んだ。また、都教委訪問、夏季集中講座等において、指導資料【基礎編】【発展編】の内容を基に、「自己評価シート」、他者評価シート」の活用方法、自尊感情を高める具体的な指導方法等について指導・助言を行った。

(1) 推進校の実践等を通して、保護者・地域と連携し、自尊感情や自己肯定感を高めることの重要性を発信することができた。

(2) 「自己評価シート」「他者評価シート」を用いて子供の自尊感情や自己肯定感の傾向を把握する学校・園を増加させることができた。

(3) 日常の授業において、学習内容や指導方法を工夫することにより、自尊感情が高まることを周知できた。

２　５年間の成果

(1) 自尊感情の３観点のバランスに着目して、日々の教科等の指導や学校行事への指導の工夫を提案できた。

(2) 子供たちが、単に自分を主張するのではなく、他者との関係の中で自信をもって主張するとともに、他者の大切さを認めることができるようになるための自分と他者とのバランスを保った自尊感情を高める指導の工夫を明らかにできた。

(3) 子供の自尊感情や自己肯定感を高めるため、学校、家庭、地域が一体となり社会全体で子供の活動や成長を認め励ます取組を提案できた。

なお、下記調査において、「自分にはよいところがある」と回答した児童・生徒の割合が増加し、平成 24 年度には小・中学校ともに全国の平均を上回った。このことも、本研究の各学校への普及・啓発の成果がうかがわれる。

「自分にはよいところがある」　全国学力・学習状況調査（文部科学省）　（%）

	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 24 年度
小学校（第6学年）	70.4(71.5)	72.0(73.4)	74.0(74.6)	73.0(74.4)	77.0(76.8)
中学校（第3学年）	60.0(60.5)	60.7(60.8)	61.6(61.2)	63.7(63.1)	69.1(68.2)

＊平成 23 年度は東日本大震災の影響で実施せず（ ）内は全国の結果

３　今後の方向性

(1) 「自尊感情や自己肯定感を高める教育」のさらなる充実

学校を中心に社会全体で「子供の自尊感情や自己肯定感を高める」ことの重要性をさらに普及・啓発するため、教員研修を充実させるとともに、引き続き広く都民へ発信していく。

(2) 自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」等の活用

自己評価シートを都内の全学校・幼稚園の全幼児・児童・生徒に実施するなど、各学校における傾向や変容の継続的な把握、系統的な指導に役立てる。

(3) 自尊感情といじめ問題の関係性の解明

慶應義塾大学の研究から、いじめられた子供や虐待を受けた子供の自尊感情は低いことが明らかになった。今後は、本研究の成果をいじめ問題の研究に活用するなどして、いじめの未然防止や早期解決、児童・生徒の健全育成につなげていく。

○　参考文献等

・幼稚園教育要領　文部科学省　平成 20 年
・小学校学習指導要領　文部科学省　平成 20 年
・中学校学習指導要領　文部科学省　平成 20 年
・高等学校学習指導要領　文部科学省　平成 21 年
・特別支援学校学習指導要領　文部科学省　平成 21 年
・「生徒指導体制の在り方についての調査研究」報告書－規範意識の醸成を目指して－
国立教育政策研究所生徒指導研究センター　平成 18 年５月
・生徒指導資料第３集　規範意識をはぐくむ生徒指導体制－小学校・中学校・高等学校の実践事例 22 から学ぶ－　国立教育政策研究所　生活指導センター　平成 22 年３月
・教科教育研究所編「ＣＳ研レポート」Vol.55　子どもの規範意識の形成と教師の指導力
国立教育政策研究所　生活指導研究センター　総括研究官　滝　充　平成 17 年６月
・人権教育プログラム（学校教育編）　東京都教育委員会　平成 24 年３月
・防災教育補助教材「３.11 を忘れない（小学校版）」　東京都教育委員会　平成 24 年１月
・防災教育補助教材「３.11 を忘れない（中学校版）」　東京都教育委員会　平成 24 年１月
・高等学校「保健」補助教材「災害の発生と安全・健康 3.11 を忘れない」東京都教育委員会 平成 24 年 11 月
・高校生の意欲に関する調査　報告書（日本・米国・中国・韓国の比較）
財団法人　一ツ橋文芸教育振興会　　財団法人　日本青少年研究所　平成 19 年３月
・中学生・高校生の生活と意識　報告書（日本・米国・中国・韓国の比較）
財団法人　一ツ橋文芸教育振興会　　財団法人　日本青少年研究所　平成 21 年３月
・高校生の勉強に関する調査　報告書（日本・米国・中国・韓国の比較）
財団法人　一ツ橋文芸教育振興会　　財団法人　日本青少年研究所　平成 22 年４月
・高校生の心と体の健康に関する調査　報告書（日本・米国・中国・韓国の比較）
財団法人　一ツ橋文芸教育振興会　　財団法人　日本青少年研究所　平成 23 年３月
・高校生の生活意識と留学に関する調査　報告書（日本・米国・中国・韓国の比較）
財団法人　一ツ橋文芸教育振興会　　財団法人　日本青少年研究所　平成 24 年４月
・「自尊感情や自己肯定感に関する研究」　報告書　慶應義塾大学　平成 22 年３月
・「自尊感情や自己肯定感に関する研究」　報告書　慶應義塾大学　平成 23 年３月
・「自尊感情や自己肯定感に関する研究」　報告書(追補版)　慶應義塾大学　平成 23 年９月
・「自尊感情や自己肯定感に関する研究」　報告書　慶應義塾大学　平成 24 年３月
他各種研究資料

○　平成 24 年度　自尊感情や自己肯定感に関する施策・研究等経過

・平成 24 年度　東京都教育ビジョン（第２次）に示された 12 の「取組の方向」
＜国際社会で活躍できる人材を育てる＞
【子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育の充実】（指導部）
・東京都教職員研修センター　教育課題研究
研究主題：「自尊感情や自己肯定感に関する研究（５年次）」
研究推進校：千代田区立九段幼稚園、目黒区立五本木小学校、町田市立町田第五小学校、
小平市立花小金井南中学校、清瀬市立清瀬第三中学校、
都立第三商業高等学校、都立墨東特別支援学校
・平成 24 年４月：第１回「自尊感情や自己肯定感を高めるための教育」推進校・園連絡会
・平成 24 年７月：第２回「自尊感情や自己肯定感を高めるための教育」推進校・園連絡会
・平成 24 年８月：平成 24 年度　夏季集中講座　シンポジウム「国際的な視点から日本の子供たちの自尊感情や自己肯定感を考える」　参加者数 283 名
・平成 24 年10月：目黒区立五本木小学校　研究発表会
小平市立花小金井南中学校　研究発表会
都立第三商業高等学校　学校運営連絡協議会にて研究報告
・平成 24 年11月：町田市立町田第五小学校　研究発表会（全国小学校道徳教育研究大会東京大会）
町田市教育委員会　町田市教育講演会「子供の自尊感情や自己肯定感の向上を目指して」
・平成 24 年12月：千代田区立九段幼稚園　研究発表会
都立墨東特別支援学校　全校保護者会にて研究報告
・平成 25 年１月：清瀬市教育委員会　命の教育フォーラム
・平成 25 年２月：清瀬市立清瀬第三中学校　保護者向け研究報告会
第５回　子供の自尊感情を高めるための教育研究推進本部会議
・平成 25 年３月：子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育フォーラム
（自尊感情や自己肯定感に関する研究報告・推進校の取組紹介、自尊感情や自己肯定感を高めるためのシンポジウム「自信　やる気　確かな自我を育てるために」、講演・演奏）